

---

# **最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）**

落果聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

### 【NNコード】

N8195Z

### 【作者名】

落果聖

### 【あらすじ】

二人がかりで一つの魔法を唱える現代。炎を使う魔法使いの名家の生まれである火野昇は、天才魔法使いであるが炎の魔法を一切使つことが出来なかつた。そんな昇は自らの野望を叶えるために魔法高校に入学した。魔法高校では一人一組で魔法を学ぶのが基本であり、一緒に学ぶ相手の実力が学校生活を大きく左右してしまう。

しかし残念な事に昇のパートナーは炎の魔法しか使えない補欠合格のド素人である倉守美海になつてしまつた。そんな一人が一つ屋根の下に暮らし、助け合いながら自らの望みを叶えるために戦う現代

学園ファンタジー ダブルヒロイン、チート主人公になる予定ではあるけど予定は予定で未定だったりします。タイトル変更さらにタイトル募集中

## プロローグ

魔法高校、正式名称は魔法特区大学附属高校には毎年三万人近くが入学する。

なぜそんなにも入学希望者がいるのかと言えば、この場所では地位も名誉も金も望むのならば全てを手に入れることが出来るからだ。二十歳未満で所得が一億円を超えていることも珍しくないし、卒業後政治家として活動している人もいる。

そこまでいかなくとも、魔法高校と大学併せて七年間を過ごしほどほどの成績で卒業できたのならば、一流企業へ簡単に就職することも出来る。

これが学校の光の部分。

光がある場所には必ず闇ができる。

魔法高校が発表しているデータでは毎年数千名にも及ぶ死傷者が出ていて、名目上は事故として処理されているが、実際は魔法使い同士の決闘によって死んだり怪我をした数だ。

魔法使い同士の決闘では、ミンチになつた肉片が残つていればマシな方で、死体そのものが消失していることも珍しくない。

対照的に過失致死罪での逮捕者はほとんど居ない。これは魔法高校が事実上殺人を容認しているからだ。

だからといって魔法高校が生徒の死を望んでいるわけでは無い。魔法高校では入学希望者に対して事前にこれらの事をきちんと説明している。

それでもなお、若者達はそれぞれの野望を、希望を抱いてこの学校に入学していく。

一瞬の静寂の後拍手が湧き上がった。最低の気分だ。

まず闘技場を始業式に使うつて言う発想が最悪だ。毎年この闘技場だけで死人が100人は出てるぜ？ そんな場所で祝いの門出がなんて語るのは馬鹿らしい。

そんな物よりも俺が欲しいのは歓声だ。煮えたぎる興奮が頂点に達した時に心の奥底から湧き上がつてくるような奴。それこそが勝者に対する報酬と言う物であるべきだろ？ まあ、新入生代表の挨拶であることを考えれば入試一位で突破した者への報酬と考えられるけど、大半の人間にとつては常識だからやつてるだけにすぎない。

挨拶を終えて壇上から降りる頃には闘技場内に広がるのが拍手から話し声に変わっていた。一人二人ならいざ知らず、この騒音に参加しているのは会場内にいる新入生約30000人で、自分の声を相手に伝える為にさらにわめき散らすものだから收拾がつきそうもない。

つむさいつて思うけど、だからといって騒いでしまう気持ちも解る。これからこの学園入学式における最大のイベントが待っているのだから。

席に戻ると俺の相棒である氷河樹里<sup>ひょうがじゅり</sup>が隣の席で待っていた。

氷河樹里<sup>ハイモリ</sup>とは五歳の時から和声魔法<sup>コード</sup>を一緒に使う相手である和音として付き合ってきた。おかげで異性としての認識は全くなない。

「ノボルかつこよかつた。」

樹里は俺にそう語りかけながら手のひらサイズの袋を俺に手渡した。この袋がイベントの主役だ。

「何言つてるんだよ。俺は何時だつてカッコいい」

「たまには褒めてあげよつかと思つて言つたらこれだもん。可愛く

ないな

へえ～樹里はそんな事を言つのか？

ならば意趣返し。

「…………樹里の髪の毛綺麗だよな  
意趣返しではあるけれど、心にもない台詞かと言ふばそつでもない。

「髪は乙女の命だから綺麗にして当然だもん」

樹里はそっぽを向いてしまう。

髪は乙女の命と口癖のように言つだけあって、樹里の髪の毛はかなり綺麗だ。胸元まで真っ直ぐ伸びた髪で、風にいつも弄ばれている。色は銀とも青ともつかない色で、光の反射で幾重もの姿を見せる。

もつとも、髪色と言ひ點にひいて言えば、氷河の一族はみんな同じような髪色だ。魔力が関係してるらしいけど、詳しくは知らない。さすが魔法使いの名家と言いたい所だけど、他の名家にそんな特色は存在せず、たまに全然違う髪色の子供が生まれたりするぐらいだ。少なくとも火野昇、つまり俺は黒髪だし、火野の一族もほとんどが黒髪だ。

俺は樹里の顔を手でもつて自分の方へ向けた。

樹里の顔は紅く染まっている。

そして何より、そんな顔を見せたくないのか必死になつて反対へ向こうとするから可愛い顔が台無しだった。つぶれて変顔である。さてこの顔は一体どこまで変顔になれるのだろう？ と俺が趣向を大幅に間違えようとした時に闘技場からざわめきが消えた。

壇上には樹里の叔父である氷河氷柱が立っていた。

前に何度か会つたことがあるけれど、あまり相手にしたい相手では無い。快樂主義者を自称して、その場その場の刹那的な生き方をしている。そんなわけで俺も樹里も何度か迷惑を被つた事がある。「君たちの学年を担当する氷河氷柱です。まあボクの事なんてどうせイヤでも覚えるので、さっそく本題。

さきほど君たちに配られた袋には指輪、鍵、寮の住所と部屋番号が書かれた紙の三つが入っているはずだ。……もしも無かつたら後で職員棟に来なさい。

それでだ。指輪を取り出して中指に付けて貰いたい。

この学校で初めて魔法を学ぶ物も少数いるので説明しておくと、この指輪は結合指輪リンクリングと呼ばれる物で、二つ一組の指輪だ。この指輪を使い一人一組で使う魔法、和声魔法ハーモニーが君たちの学ぶ魔法だ。

なぜ一つ一組なのに君たちの手元に一つしか無いのかと言えば、もう一つは君たちがこの学校で和声魔法ハーモニーを使う時のもう一人の相手コードである和音の手に渡つているからだ。和音の相手に不安があるかも知れないが、入試の時に相性も調べてあるので、魔法が使えないなんてことはまず無いので安心して欲しい。

この指輪は魔法を使うだけでなく、もう片方の指輪をはめている人物と通話することが出来る。それで通話して友情を深めて貰いたい。

相手の声は頭の中で響く、自分の声を伝えたいときは口で喋るのではなくて、強く思えば伝わる。逆に言えば言いたくなくても伝わつてしまつこともあるので、慣れない内は気をつけよう。以上。これをもって入学式は閉会。」

そう言つと氷柱は逃げるよに壇上から降りた。

俺の時と違う変わらない拍手が舞つた後についにみんなのお楽しみタイムである和音発表の瞬間だ。

和音は席替え、いや、クラス替えなんかよりもよほど重要だ。和声魔法を一緒に使う相手を変えることはほとんど無い。相性によっては全然使えない可能性もあるし、同じ相手としている方が魔法の扱いが容易になるからだ。

逆に言つてしまえば、そう言つ相手がすでにいると、まず相手が変わることない。長期間同一の和音コードだと、お互いの魔力の波長が似通つてくるのだ。

つまりだ。十一年間も和音である樹里を超えるような相手なんて

まず表れる訳が無い。見知った顔に安堵することはあっても驚きやとまどい興奮なんて物とは無縁だ。

「そう言つわけで、俺にとつてはこのイベント、特に楽しいところが無かつた。通話の必要性が全く無い距離だぜ？」 友情を深める必要なんて今さら無い。

俺は袋から指輪を取り出すと、早速指に付けた。と思つたら樹里に止められた。

「もう一人で付けないでよ。いっせーの～っせ、一緒に指輪をつけようよ」

「はいはい」

まあ樹里が相手なら特に問題も無い。人見知りと言つわけでも無いが、これから寮生活が始まる時に友人が居ると言つのは非常にありがたいものだ。

「いっせーの～っせ！」

樹里のかけ声と共に俺と樹里は指輪をはめた。と言つか何でお前は左手薬指にはめる？どの指でも、と言つつか足の指でも問題は無いけど、そこは別の意味で問題があるだろ？

指輪をつけて十秒もしたけれど、頭の中で特に言葉が響く様子は無かつた。樹里が目を細めてにらみつけてくる。メガネでも忘れてきたようにしか見えない。

「ノボルなんか反応してよ」

「お前こそ何か言えよ」

「わたし言つてるよ！」

「俺も言つてるぜ」

てすとてすとてすと。と面白との欠片も無いつまりない文章をね。

「故障？ 叩けば治る？」

「電化製品は叩いたつて直らないし、クソガキだつて叩いて直る事の方が多い。ましてや纖細な魔法道具である結合指輪が直るわけ

俺が言葉を続けようとしているとき、樹里の顔色が変わった。おぞましい何かを見たような顔で、樹里が迷子になつた時同じような顔をしていたのを思い出させた。

「ねえ……ちょっと言いにくい事いいかな？」

「じゃあ結合指輪コンクルイントを使って話してくれ。それなら聞かれない」

「もうー！ そうじゃないのー！ あのね。どうやら別の人コードが和音みたいなの」

俺の頭は理解を拒絶した。

「俺よりも相性が良いと言つことはかなり強いって事もあるし、むしろ良い事コードだろ？」

一般的に和音は自分と同じ程度の実力であることが望ましいとされる。和音を決めるのに使われるワーグナー方式の判別法では実力の部分も加味されている。つまり、樹里の和音は俺ともほぼ同等の実力を持ちつつもさらに俺よりも樹里との相性が良い相手であると言つことだ。

「でも、わたし、ノボルが良かつた」

樹里は本気でへこんでいた。

「俺も樹里相手が良かつたが、決まつた以上しようがない。」

俺は樹里の頭を撫でる。何時撫コードでても撫で心地は満点だ。

「こんなところでへこんでると和音に失礼だ。いつもの笑顔に戻つて出迎えてやれよ」

「う、うん。じゃあ向こうから場所の指定されたから行つてくるね。また後で、連絡してね、絶対だよ。そしたらお互いに和音を紹介しようね」

樹里は俺に向かつて手を振りながら人混みに紛れていく。名残惜しそうにこっちを見続けるものだから樹里は他の人に当たつてしまつた。

俺が見て無くとも大丈夫なのか少々不安だが、俺が付き添つ訳に  
もいかないしな。俺にも和音ヒツヂが待つてることだらうじ。  
向こうが連絡してくるまで待つしか無い。

俺は携帯ゲーム機を取り出して、時間を潰すことにした。

遅い。あんまりにも遅い。カツラーメンなら三つ出来るぜ？  
一分で食べる俺なら五個は食べ始めるぜ？ 本当に故障か？

（ごめん待つた？ あんた名前は？）

妙に癖のある女の声だ。

（何で遅れたんだよ？）

（そこつて普通ボクも今指輪はめた所なんだよって返す場所じゃな  
いの？）

（俺は女に特別優しい訳じゃない。それに待ち合わせじやなくて、  
指輪をはめるだけなのに遅れる訳ないだろ普通）

（せっかく花もたせてあげよってのに、つまんない奴  
そんなくだらない花なんかいるかよ。）

（んで、何で遅れたんだよ）

（……キンチョーしてた）

響く声に照れくささが見え隠れしていった。まあこれから和音ヒツヂとし  
てやつしていく相手だ。お説教もこれぐらいにしておくべきだらう。  
(どんな人かなつて思つてたけど、キンチョーして損した)  
もつと色々言つておくべきだったと後悔した

（俺は火野昇、君は？）  
(倉守美海)

（よろしくな倉守）

ぐだぐだと指輪越しで会話するのもあれなので、俺たちは場所を指定して落ち合つことになった。

他の生徒達もまあ似たような物で、あえて分類したとしても、学生寮の方まで行くか（基本的に和音の部屋は隣になっている。）か、そこら辺のファーストフード、ファミレスにでも入るかの一択だ。俺は人混みが嫌いだし倉守も人混みが大嫌いだったので、闘技場から一駅離れた大学研究棟駅のホームになつた。

学園の敷地内には電車が走つてゐる。学園の敷地を縦に一本横に一本周りをぐるりと囲むように一本存在してゐる。

学校」ときに何で鉄道までしかれてゐるのかと言えば、正確に言うとこの学校は学校ではなくて魔法特区に指定された特別な場所だからだ。その魔法特区の中に教育施設が分散して配置されていふと言つた方がより正しいが、世間一般では魔法大学と一纏めにされている。

この学校が殺人を実質容認しているのもこの魔法特区制度が主な原因だ。

日本が魔法産業を主軸にする国家戦略を打ち出して三十年。その甲斐あつてか現在の日本は魔法技術に関して他の先進国よりも十年ほど先と言われてゐる。

そう言つわけで、この学園の敷地というか、魔法特区には様々な企業があり、様々な魔法の実験が行われ、富、名譽、地位を求める人が集まり、命がゲーム感覚で消えている。

電車に数分ほど揺られてゐると大学研究棟駅についた。

学生寮がある方面とは反対側にあるので、先ほどの人混みは夢か幻かと聞きたくなるほど人が全然居なかつた。

駅にいるのはスーツを着たおじさんとか、白衣のままスーパーの

袋をぶらさげて立てる姉さんとかで、少なくとも俺の和音と言えるような人じゃない。

俺はちよりちよりと辺りを見回すけれど、やはりそれらしい人はいないし、指輪で話しかけても反応が無かった。大半の人間にとつて指輪による通話は思考が漏れ出ているのとほとんど一緒なので、用が無ければまずしない。

つまり、また待つのか……これなら携帯電話の番号ぐらいは聞いておけば良かった。魔法特区内なら電車内での通話も合法だしね。

ベンチに座り十分ほど待つているとようやく次の電車が来た。扉の開く音と共に俺はその中に少女がいるかどうか探すためにきょろりと見回す。

はずだつたのだが、そんな必要もなく、田の前にああ絶対こいつだ。と確信させる少女が目の前に立っていた。

初めて見たときの感想を言わせて貰うのならば、最悪だつた。まず身長が低くて、手足が細い。これが女の好みについての感想だつたならば、まあ悪くない。と軽く返せたかも知れないので、魔法使いとしては致命的だ。

魔法使いは肉弾戦もこなすので、出来れば高身長の方が良い。真っ赤な髪をツインテールにしており、つり目で真っ赤なアンダーフレームの眼鏡をかけており俺のことをまっすぐ見据えている。唇は上に曲がり、さてこれからどんな悪戯をしようとしているようにも見えた。

眼鏡をかけているのも魔法使いとしてはマイナス要素だ。コンタクトレンズに後で強制的に変えさせよう。

俺が値踏みをしているように倉守も値踏みをしているのだ。電車がホームから立ち去ると美海は口を開いた。

「ごめん待つた？」

何、ふざけた事をいっているんだ？ 大体同じような時刻に闘技場から出て、同じ駅で電車に乗ったはずなのに何故遅れる。

文句の一つでもぶちまけてやろうかと思ったが、俺は別の台詞にした。

「いや今来た所だ」

今後の事を考えれば対立する意味なんて無い。そう言つわけで俺は美海の言つところの花を持たせて貰うこととした。

「どう考へても一本先のに乗つてきてる」

どうやら美海は花より団子らしい。

「さっきお前が今来たところって言つシシチュエーションって言つたからわざわざ言つたのにこれかよ

「あんなあたしが適当に言つた言い訳信じたの？」

「次から絶対に信じない事に決めた！」

魔法の相性とかどうでも良いから樹里と組ませて欲しいと心の底から願い始めた。

「んで、倉守は何の属性が使えるんだ？ あとどれぐらいの腕前なんだ？ 知らなくて悪いと思うが倉守ってどんな家なんだ？」

「いつぺんに言つな！ ええと、試験の時に調べたのだと炎だけだった。魔法はこの学校に入つて初めて学ぶ。最後の質問は意味がわからんない」

俺はその答えが訳解らん。

まず人間は体内に属性比率と言う物がある。例えば樹里ならば水が四割風が三割で他の三割が他の基本属性全てで構成されている。この属性比率が使える魔法の優無や得意不得意を左右する先天的な要素となる。この属性比率内に存在しない属性はどうやっても唱えることが出来ない。ワーグナー方式では10%を切つてしまふ属性を正確に判断することは出来ないので、美海の具体的な属性比率は解らないけれど、炎が八割で他の一・二・三属性で一割と言つのが妥当な所だろう。

魔法の基本属性は九種類とされており、一般的な人間で約五種類

使って。名家の出身だと全て使えることが多い。

「ワーグナー方式だとこの使える属性の数も考慮に入るはずなのだが……

「どうした？ あたしの美貌に惚れたか？」

「まな板を通り越して洗濯板のお前が何を言つてる？」「

「何を！？」

あ、でもよく見たらふくらんでこるよりにも

服の皺だった。

「それより少し用事を思い出した」

倉守はざきやーぎやーと何か叫んでいたけど俺は無視して職員棟に向かった。名家の中でも五本の指に入る火野の出身で、基本属性を八種類使え、さらに禁忌属性である時の属性まで使え、五歳の頃から英才教育されてきた俺が、ド素人と組むなんてあり得るはずがない。

リンクリンク  
結合指輪に故障が無いとするなら、学校の方に問題があつたに違いない。そう思つて俺は直訴しに来たのだ。

俺は倉守を置いて職員棟に入ると、俺は知つてゐる顔を見つけた。「おじさんちよつと話があるけどいいか？」

「ここでは樹里のおじさんじゃなくて、氷柱先生と呼んで欲しいな」「わかつたよおじさん。それで、俺の和音ハーモニーが間違つてるけどどういう事だ？」おじさんは突然笑い始めた。あまり品の無い笑い方だけど、誰もおじさんの方を見ようとはしない。たぶん聞き飽きてるんだろう。

「ああ。そういうやうだつたな。すっかり忘れていたよ。

確かに昇が間違つたと思つたのも解るよ。確かにボクも昇と倉守さんの判定結果には驚いたし、間違つたと思つて再検査もした。しかし間違つたはなかった。一年生の中でも君と一番相性がいいのは倉守美海だ。

この結果は職員達の合間でも話題になつたよ。

火野の中でも歴代最強クラスの素質を持つ入試一位の魔法使いと、どこの馬の骨かも解らない補欠入学で入ってきた一般人がタッグを組む。

学園始まつて以来の最強と最弱のコンビ。

こんな面白いことはボクでなくて面白がるだらうね

「もう一度再検査をしてください！」

「一度どころか三回ほどしたよ。倉守さんの詳細なデータは無かつたけれど、君の正確な判別データを火野に提出させた。その結果解つたことと言えば、他の組み合わせに間違いを見つけたぐらいだ。これ以上の検査はしないし、組み合わせの変更も無い」

頭が真っ白になつた。

「ボクとしてはだね。最強と最弱のコンビと言つよりは火野であるのに、火が使えない少年と、火しか使えない少女のコンビであると言つ方が面白いと思うがね。

二人でゝゝ地獄の業火ゝゝと名乗るのがベストと思うが、どうかねゝゝ地獄の業ゝゝ君？」

ゝゝ地獄の業ゝゝつて一言で俺は思考を取り戻した。

俺を蔑むための二つ名。

火野の中でも歴代最強の炎使いと称された俺の父である火野彰はゝゝ地獄の業火ゝゝと二つ名で呼ばれていた。

そんな父を持つにもかかわらず俺は火が一切使えない。だから地獄の業火から火をとつて地獄の業。

お前の業は火が使えないことだとでも言つよくな。そんな二つ名。まだからといってこの快樂主義のおじさんが、わざわざ俺を蔑む理由も無いだろう。

条件反射で俺が反応してしまつただけで、おじさんとしてはただ単に言葉遊びとして楽しいから使つたぐらいだ。

何度も快樂に付き合わされた身としてはこれぐらいで怒る気にはなれない。

「わかりました。ありがとうございます」「

「倉守さんの今後の成長に期待しなさい」

俺を超えてしまうような爆発的な成長をされたらされただで、俺の

今までは何だったのかと疑いたくなるので遠慮して貰いたい。

「そうだそうだ。昇君。後で君はボクに連絡してくるだろ？。だか

ら携帯の番号を教えておこう」

じつやつて能弁に語るとき、それは不幸の予兆だと今までの人生経験で理解していた。

時間にして五分も経っていないのだが、倉守はご機嫌斜めになつていた。

いきなり連れてかれたと思つたら逆に放置だ。

俺でも怒る。

と言つた俺はさつき似たような状況に合わされて怒つてた。

俺は謝罪の言葉を述べると、倉守は一応満足そうな顔をしていた。ハツキリ言つて下手に出るのは好きじゃない。

でも、こういう関係にしておくしかない。

俺にはこの学園で絶対に取り戻さなければならない物がある。

その為には優秀な和音<sup>コード</sup>が必要だ。しかしそれが手に入らない以上実力の低さを相性の良さでカバーするしか、俺には打開策が見つからない。

会話はぶつりぶつりと定期的にとぎれてしまう。しうがないので、俺はその場で見つけた物とかを話題に出してはみるけれど、美海は意図的に会話を止めようとする。

そんな会話とは言えない会話をしながら、俺たちは学生寮にまで

来ていた。

学生寮は基本的に全て構造が一緒だ。なので極端な当たり外れと言つ物は存在しない。あえて言つなら駅が近いとか、隣人がとてもいい人だったとか、隣人は音量全開でデスマタルを聞いていてうざいとか。当たり外れなんてこれぐらいだ。

「倉守、お前何号室だ？」

「203号室」

「今、203号室つて言つたか？」

「言つた」

「俺も203号室だ」

お互に何とも言えない空白が出来た。さつきの会話の比じやない。今すぐここから逃げたい。できれば昨日ぐらいに。

俺は携帯電話を取り出すと、氷河氷柱（おじさんではなくて先生）と血口主張の激しいアドレスに電話をかけた。

「やあボクの予言は良く当たるねえ。教師を辞めて占い師にでもなりたいぐらいだ」

「ほんと教師やめてくれよ」

「やれやれ、女の子と同居するのがそんなに嫌なのかい？ ボクが同じ年齢の頃なら、大喜びしているぐらいだよ。当時のボクは女の子と一つ屋根の下で暮らして朝起こそれたいと常々思つていたからね」

「てめえの妄想なんて聞きたくねえ！ 何でそんな無茶苦茶な話が通るんだよー？ 何か間違いがあつたら大変だろー？ 倫理的におかしいだろー？」

「ほう。樹里と一週間前まで一緒に生活していた君が言つのかい？ 片腹痛い。」

「俺以外の生徒達の話だ」

樹里に関して言えば、異性と認識するのが難しい。

「簡単に説明すると、<sup>コア</sup>和音同士で衣食住を共にした方が、相性が良くなるのは君は身をもつて知つてるはずだ。それを全生徒にもして

貰おうと言つだけだよ

「倫理的にはありえない！」

「君は楽しいことを言つね。」の学校に入るときに人を殺すかも知れない。殺されるかも知れない。そのような決意を胸に抱いて来るし、実際に書類にサインまでしているのに、今さら男女の同居ぐらいで文句を付けるようなのは、この学園ではやつてはいけないね。個室が欲しいと言つたら学園ランディングの上位に入れれば特典で貰える。君の実力なら十二分に可能だろ？」

俺は人を殺す覚悟をしてきた。きっと倉守も樹里も同じように決意して来たはずだ。

「おじさん俺が悪かつた。『めん』

「君が謝ることは無いよ。同居の話を学校に持ちかけたはボクだしね」

「お前が原因かよ！… どうしこんな無茶が通るんだ！」

「ボクは魔法使いとしては三流だけど、人心掌握は一流なんだよ。折角だから説明すると、同居で開いた学生寮を他に貸し出す為だよ。他にも色々諸事情があるけど一番の理由はこれだ」

「本音は」

「面白そうだったから」

「死ね！」

「君はそうやって怒つているけど、男同士でむき落しく同居する人々に上下座しなくちゃいけないと思わないのかい？」

「全く」

俺としてはそっちの方がまだマシなんだよ…

「そうか。とにかく同居するのも変更は無い。ボクも忙しい身だから失礼させてもらうよ」

俺が文句を言つ前に携帯は切れてしまった。

「……クソ野郎…………」

一人暮らしになるからアニメグッズに囲まれて暮らせると思つたのに！

今まで頑張つて樹里にもばれずにオタクやってきて、高校に行けば一人暮らしになるから、好きなだけ困まれて暮らせると思ってのに！

あのジジイ！

魔法少女かなめマギカのトモエさんのフィギュアとか、トモエさんのおっぱいマウスパッドとか、トモエさんの抱き枕とか全部買えないだろ！！

「ちょっと」

「ああ！？」

「「めん…なさい…」」

悪いのは倉守じゃなくておじさんだ。それなのに倉守に怒りをぶつけたってしようがない。

「ああごめん。同居で間違い無いって」

「そんなのつてありなの！？」

「君たちは人を殺すかも知れない覚悟、人に殺されるかも知れない覚悟をしてきたのに同居ごときグダグダ言うなってさ」

犯されるかもしれないと言う危険性は、殺すかも知ないと言う覚悟の中に内包されている。らしい。

ところで、一人暮らしだからアニメグッズを収集しようとしていた俺の願望は？

「倉守つてアニメ見る？」

「見ないけど、何で？」

俺の希望は途絶えた。

女の子と同居したらキャッキャウフフの桃色ワールドが始まると思つてゐるのならば、まずその桃色な脳味噌をビリビリかじる。現実そんな甘くない。

部屋の右半分を倉守の陣地になり、左半分を俺の陣地になつた。一步踏み込む毎に、百円の休戦協定条約だ。

脱衣所でバツタリとかそんなイベントが起きるわけもなく、手作りの料理が出てくるわけでもない（朝食と夕食の準備は俺の役割だ。昼食はお互い別々）

現実は全く逆だ。

「何でお前があたしより先に風呂はいつてんのよー。」

と俺は生まれたままの姿を見られたり（しかも怒られた）

「朝食はトーストか田玉焼きじゃないのー!?」

と俺の朝食までトーストと田玉焼きにされた。（俺は納豆が食べたい）

学校始まつてから最初の日曜日、俺は樹里を呼び出して昼食を取つていた。

「だいたい俺より早く起きてるなら、自分で作れよー。五時起きの俺より先に起きてるなら役割交換したつて良いだろ？ 風呂掃除とかさ」

俺はファーストフード店の中で頭を抱える。文句は山のよつてあるし、山のよつて言つたけれど、改善される見込みは無い。「ノボル静かにしないと」

口に手を当てて左から右へお口にチャックの動作もセリフで樹里は言つた。

ちりりと俺たちのことを見る人間が確かにいた。

「ああごめん。こしても樹里は良いよな

樹里の同居相手は名家の一つに数えられる風間のお嬢さんで、かなりハイテンションで楽しい子だった。

「一緒にいて楽しいけど、やっぱり生活はみんな違うからいきなり同居生活になつてすりあわせるのは大変だよ。風間ちゃん。お片付け出来ない子だし、無許可で私の簾に乗っちゃうし」

簾は空を飛ぶ魔法道具全般の事だ。大体の簾はバイクとしても使えるし樹里が持つてゐるのもそのタイプだ。ついでに魔法特区内で簾として乗る分には免許不要。

「お互いに苦労してゐるつて事か」

「でも。慣れるよ」

だといいけどなあ。口には出せなかつた。

「あ、みみちゃんだ」

俺は周りを見渡した。倉守がトレイを持つて右往左往していた。

「みみちゃんこつちこつちーー！」

その呼びかけで倉守もこりからこり氣づいて來た。嫌な奴にあつちまつたつて田は見なかつたことにしてやるよ。

樹里は席を詰めると、おいでおいでと倉守を手招きする。

「あんたと会いたくないから外食にしたのに…」

「もう、そんなこと言わないの」

文句を言いつつも倉守は樹里の隣に座つた。

「一人とも何してんの？」

「みりや解るだろ昼食だよ」

お前の愚痴をしてました何て口が裂けても言えない。

「ふーん。そう言えばさ前に聞きそびれてたけどあんたらの関係つて何なの、彼女？」

樹里は飲んでたコーラを吹いた。

「違うよおただの幼なじみだよ」

少し頬を染めて首をぶんぶんと横に振つていた。犬みたいだ。

「ああ彼女じゃなくて、許嫁だもんな」

今度は樹里と倉守が同時に吹いた。

「マジ?」

「マジ!」

俺は目線で樹里を見るつて言ひてた。樹里は顔を真っ赤にしながらうつむいていた。

「マジだ…今時本当にそんなのあんのかよ」

魔法使いの家だと今でも極々普通の風習だつたりする。

「なんでノボルは言つて恥ずかしくないの?」

少し涙を流しながら樹里は俺のことをぽかぽかと叩く。力が入つていないので全然痛くない。

「お前のそういう反応が可愛くてつい言つたくなる」

「ひどいよお……」

許嫁つて言つても諸事情で有名無実かしてゐる事を樹里が倉守に説明すれば、俺も本当の所を話しても良いのだけれど、樹里はそう言つて一切言わないので俺も言わない。

「熱いわね」

「それに」

樹里は自分の食べかけのハンバーガーを俺の口の中につつこんでまで、俺の次の台詞を止めた。

「みみちゃんつてどんな趣味なの?」

「どくしょ……お前今ぜつてーわらつただろ」

口の周りがケチャップだらけの状態でそれどころじゃない。俺はハンバーガーを樹里に返し、口の周りを紙で拭いた。

「他人の趣味で笑わねえよ」

そんな事を言い出したら俺の趣味が一番最初に笑われるだろ?それに熱心な奴バカにするのは父が……俺が許さない。

「勘違いして悪かったよ」

「ねえみみちゃんの読む本つてどんな本なの? ミステリー?」

「笑うなよ。ぜつて一笑うなよー それにあたしはお前じやなくて、氷河に向かつて言つんだからな」

世間一般でそれは笑つて欲しいときの前振りであるのだけれど、

立ち上がって身を乗り出してきてるのだから、お約束ではなくて、本当に笑われたく無いらしい。

「じゃあ樹里に向かって言えよ」

「…………れんあいしようせつ。ほら、どうせあたしみたいな暴力系女子にはあわねーとか思つたでしょ！」

キャラと合わないのを気にしていたのか。

「キャラに似合つてないって話なら樹里も全然似合つてないぞ。こいつの趣味籌だし」

その次の趣味がゲームで好きなゲームがマリオカートと言つのが、俺をとても不安にさせるけどな。

「風と一緒になる感覚つて気持ちいいよ。良かつたらみみちゃんのオススメの小説教えて欲しいな」

会話自体は三十分もたつてなかつたと思う。

しかし今まで俺が倉守に抱いていた取つつきにくさは大分軽減されたように思える。やはり女の子の話し相手は女の子つて事なんだろうか？

「きつとみみちゃんは無理してるんだよ。環境になれたらきつと良い子になるよ」

倉守が用事があると言つて立ち去つたあと、樹里は笑顔で言つた。「じゃあ樹里はどうして倉守が無理してるんだと思つ？」

「それは、私にもちよつと」

まあ、それは本人から聞くしか無いだろ？

「この一件で関係が劇的に改善されると言うのならば、その一次元に浸食されすぎた脳味噌をどうにかするべきだろ？」

あれは、俺と仲良くしてたんじゃなくて、樹里と仲良くしてただけだし。

むしろ、状況としては悪化していると言つて良かった。

魔法高校での受業の大半は魔法実技、工学魔法、魔法理論の三つで構成されている。

さらに一年から、アーティファクト魔法道具、戦闘魔法、工学魔法、純粹魔法、のコース別選択が待つている。

一般的な魔法を教える学校では実技魔法は行われずに、戦闘魔法を除いた三つからの選択になつてゐる。理由は簡単で魔法使い同士の戦闘は危ないからだ。

そのため日本で学校と言う形で戦闘魔法を学びたいのなら魔法特区に来るしかない。おかげで魔法実技の受業になると、普段は炭酸の抜けたコーラみたいな不良生徒達でも、シャキッと背筋だけは伸ばすはずなのだが、

倉守美海は見事に爆睡していた。

と言つて何でこいつ寝てるの？ お前いつも十時ぐらいには寝てるよな？ 用事が無いときは外ほつつきあるいて、帰ってきたと思ったら飯風呂寝るのくたびれサラリーマンみたいな生活してやがるのに。

同じ釜の飯を食つを実践しようと思つた結果。冷えたご飯を一人で食べることも珍しくないんだぞ？

一人一組で学ぶ魔法高校では、成績もある程度一人一組で決められる。席もお互い隣同士で配置されるので、起こすのは必然的に俺の役割になつてしまつ。

そろそろ倉守が先生に指されるタイミングだつたので、俺はほつと押した。押した。さらに押した、九十度のひねりも加えてみた。

だが、残念ながらこの死体、ただの屍のようだ。

しそうがないゆするか、と思ったときにはすでに当てられていた。さらにタイミングが悪いことに当てられたタイミングでは寝ぼけながらも立ち上がってしまった。

「倉守、遅延魔法について答えろ」

壮年の教師はすでにため息をついていた。

「……チエンマ法?」

「よだれたてるぞ」

それでようやく倉守は現実に戻ってきて、ハンカチを出して口と机を拭いた。いや、だから何で俺を睨むの?

「しようがない。火野お前が答えろ」

「遅延魔法は魔法のタイミングと場所をあらかじめ指定して行う魔法で、特長は一つで発動する時には一人ともその場にいなくても良いこと、発動するまでの合間に、魔力の配合比率を変えられるので、普段の戦闘では出せないほどの高威力の魔法を使えること、代わりに一度遅延魔法を行つてしまったら解除は本人でも出来ないので、気をつけなければいけない」

「完全な答えた。倉守、付加魔法については答えられるだろ?」

倉守は沈黙を貫いた。

だから俺を睨むの止めろよ。

「……火野答える」

「自分ではない物に魔力をつぎ込む魔法で、大きく二つの分類に分けられる。一つは魔法道具生成魔法で、道具に魔力を注ぎ込むと特定の魔法が使えるようにできる魔法。もう一つは付加属性魔法で、一時的に道具そのものの性質を変化させる魔法であり、戦闘では主にこちらを使う。」

「よろしい。いいか倉守、確かに魔法実技の最初は座学で退屈かも知れないが、ここでの事を覚えてないと受業で死ぬぞ?」

火野には申し訳ないが、良い参考例なので言わせて貰うと、七年前の721蒸発事故はその典型だ。最強の魔法使いですら、魔法の

扱いに失敗して死ぬことがある」「俺は平静を装うしかなかつた。

はりわたが煮えくりかえるのを歯を食いしばり耐えた。

立ち上がつて言つたかつた。親父はそんなへマをしないと。教師は次の魔法に関する話をしようとしたが、チャイムは昼食の時間を告げてしまつた。

倉守は昼食の時間になるとすぐ元<sup>ヒコ</sup>、教室から抜け出でしまう。食堂に行つてゐるのか、それとも外でランチでもしてゐるのか、俺には解らぬいけれど、昼休みの時間にあいつと合つたことは無い。

俺も俺で、教室や食堂では取らずに、屋外で食べる「こと」がほとんどだ。何故つて？

アニメの話がしたいからだ。

「お前よくあいつと楽団<sup>バンド</sup>でいられるな」

俺は仰木修也<sup>おのぎ しゅうや</sup>とよく昼食を共にしてゐる。彼の和音<sup>ハーモニ</sup>もやはり女子で、やはり彼もアニメ好きでお互いに似たよつた境遇だつたので一瞬でうち解けた。

樂団<sup>バンド</sup>は魔法使いのチームの事だ。火野と倉守の樂団<sup>バンド</sup>つて感じに使われる。

でも、かなめマギカで青ホムは一生来ないぜ？

「キャンセルする訳にもいかないだろ？」

「そうだけじ、俺なんか会話もあきらめてゐのじや。やっぱ女は一次元だよ」

の割には修也と和音<sup>ハーモニ</sup>は中良<sup>ヒカル</sup>と見えて見える。隣の生徒は青いのか、それともアニメの話をあきらめてるのかさて、どちらだらうか？

「でよ。女子でも昼食時の倉守が何をしてるか知らなこらしこぜ」「あいつ友達いないのか？」

「だらうな。ガツカリで許されるのは一次元だけと心得る。それより今期は何見るか決まつたか？」

よだれを垂らした恥ずかしさで、授業態度が改善されたかと言つて、答えはノーだ。むしろ乙女をそこで捨てたとばかりに、以降の授業も寝まくつていた。しかもちょっとやそつとじり起きたい物だから、倉守が指される時になると俺が答えることになつた。

俺が答えるのは別に問題じやない。俺にとつてはすでに知つていることばかりだ。

しかしこの学校で初めて魔法を学ぶ倉守にとつては、一字一句聞き逃してはいけない言葉、戦場で生きていくために必要な鉄の錠のはずなのだが……

朝早く起きて、受業は眠り、学校が終わるとどこかへ消え、家に帰ればすぐ眠る。猫と同レベルの自由気ままな生活を倉守はしていた。倉守と俺が赤の他人であつたなら、どうでも良かつたのだけど、どういう事だか俺の和音だ。

だから思わずにはいられない。

受業を起きていたら、  
対話しようとしていてくれたら、  
真つ当な生活をしていたら、  
もしここが魔法特区でなかつたら、  
俺は倉守に対してこう思つことは無かつただろうと。

その事を思いついたのは、ある晴れた日だつた。

カーテンを開けると雲一つ無い空が見えた。

初夏の柔らかな日差しの中で俺はハンバーガーでも頬むよ、事務的な挨拶でもするよに、朝起きたら歯を磨くよ、何となく思いついてしまつた。

倉守美海を殺そうと。

そうすれば、俺の『コード』は樹里になるだらう。

ここは魔法特区。

殺人が許される町。

人を殺すことを覚悟と人に殺される覚悟を持つて来る学園であることを。

それは俺が人を殺す覚悟がすでに出来ていると言つこと。

それは倉守も人に殺される覚悟がすでに出来ていると言つこと。

そこまで思考がたどり着くと行動は早かつた。その日の授業が終わると俺は早速魔法特区内の法律と校則を調べ始めた。

人殺しを容認してるけど、サスペンスドラマよろしく、ナイフでさされてたり、毒殺されたり、ちょっと違うが強盗、詐欺、なんてしたら当然捕まる。

あくまで魔法使い同士の決闘、模擬戦、などに限られる。

逆に言えば決闘と模擬戦ならば、いくら人を殺しても問題が無いどころか、むしろ魔法使いとしては箔がついてしまうし、中には人を殺すことを目的としている奴までいる。

自分の和音<sup>コード</sup>を殺すのは難しいが、自分の和音<sup>コード</sup>を殺して貰うのは難しく無い。それが俺のたどり着いた結論だつた。

もちろんその場合は共犯者が必要になつてくる。

しかしながら、共犯者を見つけるのは容易だ。

人を殺しても、金が欲しい、地位が欲しい、箔が欲しい奴はこの学校にいくらでもいるのだから。

例えば、仰木修也とか。

次の日俺は修也に倉守を殺したいと言つこと、それに協力して欲しいと言つこと、倉守を殺すことでどれだけプラスが生じるかと言ふことを懇切丁寧に話した。

修也はそれらの話をひたすら黙つて聞いていた。

そして俺が全てを言い終わると「やらせてもらひづ」の一言の後に、修也は色々と語り始めた。

実家が貧乏であり引け目を感じている事、自分は魔法使いとして有名になつて金持ちになりたいと言う事。そのためには入学当初か

ら注目される何かが必要だと思つていた事。

俺は人目のつかない校舎裏に修也と共にいた。

「俺も和音<sup>ハーモニー</sup>がウザイと思ったことはあつたけど、殺そつて思つたことはない。イカれてるよ」

と言いつつ俺が投げ渡した結合指輪<sup>コンタクトリング</sup>を指にはめているのだから、人のこと言えたもんじやない。

「ウザいとも思つていない人間を殺そつとするお前の方がよっぽどイカれてると思うぜ？」 もつと言えばウザイから殺す訳じやない。目標の為には殺すしかないつて結論が出たから殺すだけだ。

俺は人殺しを楽しむような醉狂では無い。

出来れば、今だつて殺したく無いと思つていい。

倉守があと少しでも協力的だつたら、頑張つて魔法に取り組んでいたら、そうしたら弱くてもどうにかできるのに。

俺が考えた倉守美海の暗殺計画はいたつてシンプルだ。

事前に遅延魔法を修也の体に入れておく。

修也達の楽団<sup>バンド</sup>と俺と倉守の楽団<sup>バンド</sup>で戦う。

そのタイミングで修也の遅延魔法を発動できるように仕組んでおく。詳しく調べない限りは修也がその場で魔法を使つているようにしか見えない。

遅延魔法の内容は相手に魔法を使われた時に、水属性の魔法三十六回連発する事にした。

一年生が使つても怪しまれないギリギリのレベルで、倉守を殺すなら十分だ。

どんなにミスしたとしても病院送りは免れない。

俺は修也に魔力を送り修也に遅延魔法を自分にかけて貰う。十五分程度で遅延魔法は完了した。

「これで明日の試合俺が倉守を殺すことになるんだな」  
「ああ、それでお前は学園で一日置かれる存在になる」

「緊張するな」

「人殺しは一般的に忌避されるからな。でも、魔法使いにとつてはそれは違う。どちらかというともっと身近な物だ。だから緊張するな。この学校について、人を殺さないで卒業できる方が、珍しいだろうから」

俺はそう言って修也をなだめた後、解散する事になった。

＊＊＊

今でも俺はある瞬間のことを忘れられない。

2004年7月21日

当時8才であった俺はそろそろ来るであろう夏休みの事で頭がいっぱいだった。修行ばかりの日々になることは解つてはいたけど、それでも何かと遊びに連れて行って貰えるからだ。

その日は特別と言うほどの事でも無いけれど、父は東京で戦うことになっていた。

当時の父は魔法使い同士の格闘技であるウイザードの選手であり、日本ランкиング世界ランкиングともに一位だった。それに加え日本魔法協会の理事長でもあった。

俺にとつて父は周りに自慢できる存在だった。そして俺は父を超えるようなもつと偉大な魔法使いになるとその時から心を決めていた。

父の試合を俺はテレビ越しに眺めていた。今思い返すと父の試合はつまらない。だってピンチにならずに一方的に倒してしまっからだ。

でも、それが良かった。ああやっぱり父さんは強いんだ。そう当

時は思えたから。

しかしその日の試合は違った。父は大分苦戦していた。

俺はそれをまばたきすら惜しむように画面に食いついていた。

そしてPM20:11。画面はぷつりと消えた。

最初はテレビの故障だと思った。一緒に見ていた母はテレビの故障では無いかと疑っていたし、姉は自分専用のラジオを取り出して、試合の状況を知ろうとした。

どちらも間違っていた。

正確な情報が入ってきたのはそれから数分後。

ウィザードの試合中に東京会場が消失した。

番組は次々と事故現場を写し始める。

そこには最初から何もなかつたかのようにぽつかりと空間が空いているだけだった。

意味が解らなかつた。

無敵である父が死ぬわけがない。完璧である父がこんな事を未然に防げないわけがない。俺は母にそうやって主張したけれど、母と姉はひたすら泣きじゃくるだけだった。

そこからはもう転落するだけであつた。

事故の原因は父の初歩的なミスであったこと。

父が日本魔法協会で大量の裏金作りをしていたこと。

そうして過去には名家を序列していくば最初に来ていた火野も、今では良ければ最後、悪ければ除外されるようになってしまった。

だから俺はもう一度名誉を取り戻したい。

父は強いと言つことを俺が勝利を掴むことで証明したい。

できるのならば、父がそんな間違いをしていないと言つことも。

さつと誰かにはめられたのだと。

\*\*\*

嫌な夢だつた。

定期的にフ21蒸発事故の日の事を夢に見てしまう。夢だと解つても、やはり俺は冷房の効いた部屋でコーラを飲みながら、父が苦戦している姿を眺めてしまつ。

そして画面はぱつつりと消えて、ニュースの速報が入つて来て

もう考えるのを止めよう。

俺は枕元にある目覚まし時計を手に取つた。

AM4:32いつもより少々早い時間である。美海の布団の方を見ると、美海はすでに起きているようで、もぬけの殻だつた。

あいつホント何でみんな早起きなの？ その習慣治して受業起きろよ。

いつもの俺なら、朝食を食べ一時間ほどジョギングと筋トレをしてから学校に行くのだがけど、何というか、気分が良くない。

それが夢を見たせいなのか、これから人を殺すからなのか俺にはよく解らない。

いいや、シャワーでも浴びてサッパリしようじゃないか。

そう思い俺は脱衣所を開いた。

そこには一糸まとわぬ姿の倉守がいた。

ああ、一応あつたんだね胸。

もつと纖細な描写も時間があれば出来たのだろうけれど、残念ながらグーパンチでぶん殴られた後に、扉を閉められてしまった。

前に見られてしまつたとき俺が怒られたんだからこゝは怒る場面だよね？

一分もしないうちに倉守は脱衣所から出てきた。何故かランニングウェアを着ている。

「最低」

「んな時間にシャワーを浴びるなんて知らなかつたんだよ。つてか何でお前ランニングウェア着てるの？」

「んなのあたしの勝手だろ」

「ジョギングしてたのか？」

倉守は不機嫌そうに口をへの字にまげて視線をそらす。どうやら本当らしい。前に早起きして何してるか聞いたら読書つて言つてたのに…

「……笑えよ。どうせ天才のお前から見たら、あたしのしてる努力なんて馬鹿馬鹿しいんだろ。

聞いたよ。あんたつてすつごい強い魔法使いなんだつてね。本来ならあたしと和音コードになるはずが無いほど飛び抜けて強いつて、そんな俺様なあんたから見たらあたしのしてること何ておまえじとみたいなもんよね。

あんたはあたしの目の前で差を見せつけて、さらに伸びていくのに、あたしと来たら学校入つてからずっと魔法の特訓してたけど、何の成果もねえしな。

だから笑いなよ。あいつらみたにさ」

「俺は笑つたりしない！！」

和音コードが弱いと嘆くことはあつても、

日常生活が悪すぎて殺したくなつても、努力してゐる人間を笑うことは絶対にしない。

父が俺にそう教えてくれたから、父のように俺は成りたいと願うから。

強くなりたいと強く願い実行しているのなら、目に見えていなく

ても、いつかたどり着けると信じているから。

「強くなりたいなら俺も今日からトレーニングに付き合ひ」

倉守の目が点になつた。

「笑わないのか」

「何で笑う必要があるんだよ。俺だって五歳の時から毎日練習練習練習だぜ？ 確かに俺は名家の出だけど、それだけで強くなれるほど魔法使いつてのは甘く無い」

「ほら、でもあたし、不器用だし、話すの下手だし、友達少ないし」「んなの全然関係ないだろ、でもお前不器用で、話すの下手で、友達少ないな」

「んにゃろ～ いいやがつて！」

倉守は俺を殴る。全然いたくない。

お互に笑い合つ。そう言えば倉守の笑顔を見るのは初めてかも知れない。

何だ。可愛い顔してるじやん。

「倉守、俺はお前に謝らないといけないことがある」

「ん、あんたは何もしてないじやん」

「だからこれからするんだよ」

「意味わかんないけど何すんの？」

「今日の模擬戦でお前を殺そうとしていた。遅延魔法で止められそうに無いから今日の試合には出ないでくれ

渴いた笑いが交差する。

俺はグーパンチで殴られた。

そりやあ誰が悪いかと言えば、全面的に俺が悪いのだからさ、まさか最強であるはずの俺が最弱である倉守の右手パンチだけでやられかけるとは思つてなかつた。こいつの展開はアニメ限定にしてもらいたい。

「あたし、今日の模擬戦でるからな」

「いや、お前ホント死ぬぞ！？」

「事前に攻撃来る」と分かつてゐるのに死ぬわけねーし、あたしの事

なめんな！」

「とにかく、出るなよー。絶対に出るなよー。」

「解つた解つた。でてやるーって」

やれやれ、とため息しか出でこない。

「それにお姫様は自称最強の王子様がどうとかしてくれるつて信じてるしな」

へへらへらと倉守は笑つていた。

今日のランニングは中止だ。

どうやって倉守を俺が仕掛けた遅延魔法から救い出せばいいか、考へる時間が必要だつたからだ。

死刑宣告を受けた倉守と言えば、機嫌良さをつけてシャワーから上がつてきたところだつたりする。

「シャワー上がつたよー」

「もう朝シャンするような気分じやねえよー。」

「うん？ あたしが死んじゃうかい」

「それ以外にあるか！？」

「あたしの事をそんなんに思つて……ほれんなよ」

「惚れねえよ！　だいたい何でそこまでして出たがるんだよ模擬戦」「出ないと成績響く」

「散々受業中寝てきた人間の言つ台詞がそれか！」

「散々授業中寝てたからさあ余計に出ないと不味いじゃんそれにさあ。何であたしが出るの止めなきやいけないのよ。ふつーに考えたら修也を出さない方が正解でしょ。あるいは修也に掛けた遅延魔法を解除するとか、なんで被害者あたしが一方的に被害被らなきゃいけないのよ」

「ああ！　それだ！」

「そうだよ。それを最初に考へるべきだつたんだ。」

「あんたつて緊急事態になると頭が回らなくなるタイプ？？」

「反論できなかつた。」

修也に掛かつてゐる遅延魔法を外すには修也の強力は絶対に必要だ。一応発動条件を満たすように修也に襲いかかると言つことも出来なくは無いけれど、

逮捕されてしまう。

本末転倒もいいところだ。

魔法特区は戦闘狂の殺人鬼に優しくても通り魔には優しくない。それにこの場合だと倉守を殺そつとしていたと修也が誰かに漏らしてしまつ可能性だつて出でくる。

詳しく述べられれば俺がやつたことぐらこぼれてしまつだらう。

「断る」

修也は即答だつた。

修也の携帯電話が繋がらなかつたのでホームルーム前に、やはり殺すのは中止になりました。と、とても一寧に言い回した結果がこれだ。

「お前に取っちゃ人の命なんてすっげえ軽いんだろう。

三万一千百八十二人だつたつけ？ 721 蒸発事故」

「今回の事とは関係ないし、俺の事でもないぜ」

俺は出来る限り平穏を装つていたが、それがきちんと出来ている自信は何一つ無い。

「まあ魔法使いの家じゃ人の一人や二人殺して当たり前なんだろ？ 気まぐれで殺したり殺さなかつたり、まるでゲームだな。俺にとつてはこの模擬戦一生が変わるかも知れないんだぜ？」

「お前が倉守を殺して評価されたとしてもそれはお前の力じゃない」「そんなの知ってるわ。

でもまずは注目されないとな。俺はお前と違つて金も才能も地位も無い。

だから今回のことはチャンスだと思つてる。

例え俺の実力が最終的に露呈してしまつたとしても「ネとか作れば今よりは絶対にマシになるからな。

それに倉守は強くないが、今学年最強どころか学園内最強候補の一人であるお前の和音だ。<sup>ハンド</sup>魔法使いを楽団で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど高く評価する

これ以上交渉の余地は無いとでも言つようじに、修也は自分の席に座りヘッドフォンを着け携帯電話を弄り始めた。

模擬戦は五時間目から行われる。

昼休みに作戦を伝えたけれど、きちんとやつてくれるのだろうか。ハツキリ言つて心配だ。

模擬戦は学校近くにある闘技場で行われる。

魔法特区内にはスーパーと闘技場が同じ数だけ存在していると言われている。

なぜそんなに有るかと言えば生徒の自主練から、中小企業が魔法道具の実検に使つたり、生徒同士が明日の昼食代を賭けて勝手に戦<sup>アーティ</sup>フクト

つたりと、多種多様に使われているからだ。

もちろん当然魔法特区内にある魔法高校も闘技場のお世話になる。闘技場内は一般的な体育館とそこまで変わらない。あえて言うなら真つ平らであるべきなのが体育館で、真ん中に大きなリングが設置されているのが闘技場だ。

「模擬戦の前に和声魔法の手順について復習するぞ。

まず楽団は入力、出力の役割を分担して行う。

まず入力は大気中にあるマナを取り込む、取り込んだマナを転調回路に入れて魔力に変換し出力に対しても魔力を送る。

出力は結合指輪から送られてきた魔力を混ぜ合わせたり、発動を指定したりして魔法を実行させる。

例えば炎の魔力が送られてきたとしよう。出力は体内で発動されることによって、自らの身体能力を向上させることも出来るし、体外に発動させることによって火を起こすことも出来る。実際に使うタイミングを指定してずらせば遅延魔法になる。

もちろんそれらを同事にこなすことも出来る。慣れれば、炎と水を同事に体内で発動させつつ、風と土を混ぜた魔法と炎魔法を体外で使うことだって出来る。

今回の模擬戦はドールマスター戦で戦う。ドールマスター戦について、くらも……火野答える

「は、はい！」

話を全く聞いてなかつた。

「じゃあ倉守起きてるみたいだからお前が答える

「ドールマスター戦はお互いの出力だけが戦うルールで入力はリングの外にいて攻撃してもされてもいけないルールです」

「初めてまともに答えてくれて先生はとても嬉しいけど、倉守は体育の時間だけ張り切る小学生と一緒にだな」

そこかしこで失笑が漏れた。

「ルール的にはどこにいても良いが、結合指輪で魔力を渡すときにお互いの距離が遠ければ遠いほど貢える魔力が減っていく。

逆に近ければ、魔力の減りを最小限に防げる、さらに手を繋いでいる状態だと結合指輪なしでも魔力を減らさずに受け渡す事が出来る。

ドールマスター戦のルールでは手を繋ぐことがリングの中に入るのと同じ行為になつてるので出来ないが、出来る限り和音の近くにいろ」

倉守と修也はリングにあがる。

本来のウイザードのリングならば一边が88メートルで出来ている正方形の物を指すが、この闘技場にあるのはその半分である44メートルの物だ。それでも十二分に大きいように感じられるかも知れないが、一流の魔法使いにとつては鳥かご並みのサイズだ。

倉守と修也はお互いに20メートル離れた位置で対峙する。

(昼休みに言つた作戦大丈夫だな?)

俺は結合指輪越しに倉守に話しかける。

(アレを作戦つて言うの? もう始まるから黙つててよ)  
ホイッスルが鳴り響いた。

俺は早速大気中のマナを体に取り込み始める。

自分が炎そのものになるイメージをして貰えると、マナを取り込む事とマナを魔力に変換をする事が何となく解つて貰えるかも知れない。

ドールマスター戦は一般的に派手な戦闘になりがちと言つことで人気だが、魔法使いの視線になると状況は一変する。

入力が出力に的確な指示と魔力を送り続け、出力はその言つこと出来る限り聞きながら状況を相手に伝える。

まさに人形遣い『ドールマスター』の戦いと言つわけだ。

もつとも、それは熟達した腕前と阿吽の呼吸が出来る楽団の話だ。倉守に仔細な指示を出したところで混乱するだけだ。

なので事前に出した指示は、木属性の魔力を送るから体内魔法だけ使え、攻撃のタイミングなどは全部任せる。こちらが指示した時

に体外魔法を使ってそれ以降体外魔法を好き勝手に使え。

……うん。ほぼ無策だ。

俺が体外魔法を使うなと言つた理由は体外魔法の発動を遅延魔法発動の条件にしたからだ。

体外魔法による攻撃、水魔法なら氷の具現化による串刺しを防ごうと思うのならば、同じく何らかの体外魔法を使うのがセオリーダ。火なら炎、風なら高圧縮された空気など、そう言つた物をぶつけて相殺させる。

事実、試合開始直後から修也は水属性の魔法を放つていて。

一メートルほどの氷柱状の氷が地面から突き抜けてくるインパクトのある魔法だ。

しかし、攻撃そのものは直線的な動きで一発一発間が空いているために、倉守は寸前の所で後ろに避けることが出来ている。

俺は俺でもう一つやらなければならない事があつた。

周りを見渡すとすぐに見つけることが出来た。

俺はリングを見ながらそちらの方向に移動する。ドールマスター戦ではアクトの動きを見て、出力の動きを事前に予測すると言つた事がある。

もちろんその逆に相手に予測させるためにわざと離れた位置に移動することもある。

そのため移動そのものは誰にも怪しまれ無かつた。

試合は完全に劣勢だった。逃げ回るだけの倉守であるが、攻撃は何度かかすつてしまつていて。それに対して修也は一歩ずつ全身しながら体外魔法でリングの端に追い詰めている。

木属性の体内魔法は全体的な身体能力の向上だが、それにだつて限界はある。身体能力を向上させるために魔法を使って体を酷使させていい訳なので、一瞬の為に長期的な力を先取りしてのような物だ。。

もうこれ以上倉守に逃げさせるのは無理だ。

遅延魔法の発動が無くとも、修也からの攻撃を一々二度直撃するだけで生死に関わつてくる。

(ぶつぱなせ！！)

「はいよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

倉守の指輪は真紅に輝く。

リンクリング

魔力が体外に放出されるとき結合指輪は輝く性質がある。  
それとほぼ同時に修也の背後上部に巨大な氷の固まりが出現し、そこから触手のようになめらかに動く氷が倉守をめがけて襲つ。

今だ。

俺は樹里の手を握つた。

その瞬間世界は凍り付いた。

時間停止は俺と樹里が使つ魔法の中でもっとも得意な魔法の一つだ。

通常の戦闘なら8秒ほど止められる。

しかしながら、これは戦闘ではない。戦闘なら時間停止後の行動なども考えて、ある程度余力を残しておかなければ成らないし、止まつた時の中で何かをしようとするならマナと魔力を時間停止とは別に用意しておかなければならぬ。

しかし今そんな事はどうちらも些末な問題だ。

三十秒。

三十秒は俺と樹里の世界だ。

俺は樹里に引っ張られてリングの上にあがる。

今にも襲つてきそうな三十六本の氷の触手一つ一つに、木属性の

体外魔法で作られた樹木達が、数秒後に破壊できるように設置しておく。

この作業が意外に難航してしまつ。

あんまりにも出来が良すぎると介入がばれてしまう可能性がある。あくまで倉守が出来そつたギリギリのレベルにしておかなければならぬ。

樹木の設置が終わり俺と樹里は元の場所に戻つた。

俺は樹里の手を離した。

時は徐々に本来の速度を取り戻していく。

瞬間に表れた氷の固まりに対応して樹木がそれを蹴散らした。皆が呆然としている。魔法を使つているはずである倉守まで驚いてしまつていて。

そんな中でも俺は倉守に供給する木属性の魔力を作り始める。時を止めたばかりなので、かなりきつい。

驚きはさらなる驚きによつて覆される。

さきほど全て壊したはずの氷の固まりがもう一度、そこに出来上がつていた。

俺は一瞬何があつたのか解らなかつた。

俺が仕込んだのは36発を一回分なのだ。一回目が来るわけなんて無いのだ。

違う。

他の別の人気が俺のを模倣して一回目を仕組んだんだ。

修也はこのことについてもう前に話していただじやないか。

『魔法使いを楽団で見る人なら、人を三十人殺すよりもよっぽど

高く評価する』

倉守を殺して利益を得るのは修也だけじゃない。修也の和音も当然利益を得る。こちらが、どうにかして防げないかと思案していたときに、修也達は防がれてしまった場合の、保険として同じ遅延魔法をもう一回使うことにしていたのだ。

こうなつてしまつと、ギリギリ使えるレベルの魔法にしてしまつたのが災いになつてしまつ。

瞬間的に行つ通常の魔法ではなくて、ある程度時間をかけることが許される遅延魔法ならば実力よりも上の魔法だつて使えるだろ？。ましてや、お手本まで手元にあるのだ。出来ないわけがない。

前話してたときは和音と仲が悪いって言つてたくせに、一緒に人殺しをしようだなんて超仲がいいじゃねえかよ！  
(避ける！――！)

俺に出来ることは全力で魔力を供給することだけだ。

倉守は最初の一撃を手元から発動していた木魔法でどうにか凌いだ。

氷は今までの単調な動きではなく、倉守にぶつかる瞬間まで水の形を取りながら、蛇行しながら倉守に近づいてくる。

しかし一発目二発目が足にかすりバランスを崩して倒れてしまつ。四発目五発目六発目が倉守に襲いかかつてくる。

「最強つて大した事無いんだな」

倉守は微笑む。

倉守の指輪がもう一度真紅に輝く。

倉守に向かつて氷が刃状になつて襲つてくる。そこを倉守は自らを吹き飛ばすように木属性の魔法を使った。

飛ばされた先は、修也の所だ。

不意を突かれた修也は身動きを取ることが出来ずそのままぶつかつてしまつ。

倉守は修也を羽交い締めにすると、七発目八発目九発目の氷に対

する盾にした。

試合結果は倉守の勝利で終わった。懸念してた遅延魔法も修也自身に魔法が当たった為に魔力と相殺してしまった。

倉守は死なかつたし、今回の模擬戦で修也の樂團はかなり注目を浴びることになった。そりや、遅延魔法と言つても72回分の水魔法なんてそんじょそこいらの一年生のやることでは無い。教師的にも詳しく調べようと思わせるレベルでは無かつたらしく、特に詮索はされてない。

これで人殺しの疑惑が世間に出来ることもなく、みんなハッピー、みんな幸せ、やっぱり物語はグッドエンドだよね！

と言うわけにはいかなかつた。

ホームルームが終わると、樹里が今までに見たことの無いような笑顔で（出来れば今後二度と見たくなり）俺を手招きしていた。

一言もかわさずに俺は樹里の部屋に連れ込まれた。女の子の部屋なのに、何も嬉しくない。

「ノボル。みみちゃんを殺そうとしてたよね？」

幼なじみの田はじまかせなかつた。

十一年間も和音やつてたら俺が使いそうな魔法なんて一発で解っちゃうよね。

「私が昼休みで聞いたときは、仰木修也君がみみちゃんを殺そうとしてるつて話だつたんだけどな」

樹里が言い出す前に俺はすでに正座していた。

「そ、それはですね……」

「私ノボルに人殺しになつて欲しくないなあー。自分のわがままの為に人殺しちゃう人はイヤだなあー」

「トテモハンセイシテマス」

「謝るんだつたら私じゃなくてみみちゃんにじやないかなあ～？」

「ハイオツシャルトオリデゴザイマス」

樹里は子供っぽい笑顔をしながら俺の周りを歩いてくる。

そんな状態が何十分も続いた後、樹里は唐突に手をパンッと叩いた。

そして樹里はイタズラっぽく人差し指を口につける。

「もしもまた似たような事があつたら、パパに頼んで許嫁の話を無かつたことにして貰うね」

「マジ？」

「本気だよ」

ワインクをする樹里は非常に楽しそうだった。

## 1学期期末試験 美海▽S樹里編 予告（前書き）

予告編と本編は違う場合があり、また、本編には出てこない台詞が出てくる可能性があります。ご了承ください。  
またネタバレが嫌な人も見ない事を推奨します。

## 1学期期末試験 美海VS樹里編 予告

魔法高校は実技点、日常点、試験点、の三つの点で成績を決めている。

そして倉守は日常点も、試験点もダメダメであった。

「私のミルちゃんが～～～～～！」

「あたしを名前で呼ぶんじゃねえ～～～～～風間りちゃんって呼べ風間ちゃんって！」

まあ恋愛けやんは無いよな。恋愛って言つか憐哀だ。

「もしかしてあたしのままだと退学ーー？」

もしかしながらテ스트が有ることは入学当初からか入学前でも解ることだ。

そして退学しやすい制度であることも。

「そんなことより桃鉄しようよ桃鉄！～」

「俺は最強なんだぜ。死ぬわけ無いだろ？」

俺は微笑み樹里の頭を撫でる。

「倉守美海さん、死ぬ覚悟は出来てますか？」

魔法使いの朝は……別に早くない。

受業が終わってからがトレーニングの時間だ。

一緒にトレーニングをするように成ってから一ヶ月が経過し強くなったかと言つと、そんなすぐに効果が出るなら苦労しねーよ。もちろんお手軽ですぐに効果が出るような素晴らしい物があるのなら、俺だつてそれをやるだらうし、

倉守だつてすぐにでも実戦してだらう。

いや、実際に実戦していたと言つた方が正しい。

倉守が自分でくみ上げたメニューはかなり上級者向けのメニューだつた。少なくとも初心者に出来るわけがない。

では初心者にも優しくきちんと上達するメニューとは何か。

「もつ、無理……」

倉守は息を荒げた。

「まだまだ、これからが本番だぜ？」

「え、そんな……」

初心者には7キロのジョギングは厳しいのだろうか？

もしかしたら魔法使いだから特殊な特訓でもすると思う人がいるかも知れないが、魔法使いのトレーニングなんて基本的には、一般的なスポーツとかぶる部分が多い。

一応魔法使いの家にだけ伝わる門外不出の特訓と言つものもあるけれど、あんな危険な特訓を一般生徒に考えなしにやつたら、毎年の死亡人数の桁が一つか二つ増える。

俺も火野に伝わる特訓を一度だけやつた事がある。確かに効果観面だつたがもう一度シタクアリマセン。

「ねえ、本当に短期間で強くなれる方法つて無いの？」

「ンなもんあるか！」

火野の特訓方法を教えたなら倉守は絶対やるーって言い始めるんだろつた。

断言してもいい。やつたら絶対に死ぬ。

「ほら、走れ走れ、後2キロあるぞ！」

「5キロで終わるじゃないの？」

「俺はいつも18キロ走ってるぞ。それに一緒にトレーニング始めてから一ヶ月そろそろ5キロから7キロにするには良いタイミングだと思う」

「うへー」

倉守はうなだれる。

「強くなりたいんだる？」

「うん」

強くなりたいんだろ？と、問いただすと、倉守は何時だつて気合を入れ直す。

強くならないと貴方は死にますよと死刑宣告でもされてるよう少し怖い。

いや違う。倉守は怖い。

行動原理が全く理解できない。

単純に強くなりたいと思っていたのなら、もっと知識を蓄えてたりしてもおかしくないはずなのに、倉守は魔法に関する知識がほとんど欠けている。

俺には倉守が魔法に興味無いように見える。

魔法に興味が無いけど魔法高校に入学する奴なんて、俺の知ってる限りだと、樹里の和音コープである風間ぐらいだろう。

彼女の場合はかなり例外的だ。魔法使いの名家であるから体面上しうがなく通っているだけにすぎない。

彼女の意志はそこに介入しないのだ。

対して倉守は自分からこの道を選んでいる。

「なあそう言えばお前は何で魔法使いとして強くなりたいんだ」

「……どーでもいいじゃん」

倉守は視線をそらした。

言えない理由。

それは俺が信頼されてないからなのだろうか?  
まあきっと何時か話してくれるだろう。

それよりも今はもっと大事な事がある。

「解った。5キロで走ろう」

「あたし強くなりたいから頑張って7キロ走るよ」

「もちろん走つて貰いたいけど、ちょっと嫌な事思いでね。そろそろテスト対策しないと不味い」

「テストってけつこう先じゃないの?」

今は6月の中旬。確かにテストの一週間前から頑張るタイプには少々早いだろ?」

そう普通の学校なら

「筆記試験は7月前にやる。7月からは実技の試験が入る。実技のテストは三週間連続での試合だ。一日一回合計で15戦やるぞ」  
「マジで!? そんな早いの!? 氷河はそんな事言つてなかつたのに!?」

「そりや、あいつはテスト勉強なんてしないからな。しなくても点数取れる」

「それにしても実技の試験回数多くない?」

この学校に入つてきてそんな事を言うのはきっと倉守だけだろう。魔法高校の実技試験は全国で放送されている。成績上位陣の戦いはプロのウィザードと比較しても引けを一切取らない。そんなプロレベルの試合を毎日長時間見ることが出来るのでウィザードファンならばこの時期を忘れるはずが無い。

そう忘れるどころか知らないはず無いんだよ。この学校に来るような奴だつたら……

ホント、どうして魔法使いになりたがるんだか。

「とりあえず、実技のテストに関しては今学期はあきらめてる。たぶん五勝も出来たら良い方だ」

「模擬戦は結構成績良かったのにどうして控えめなの？」

倉守暗殺の後にも模擬戦は何度か行われた。俺たち樂團の成績は

四勝一敗。確かに悪くない成績だ。

「ルールが違う。ドールマスター戦じゃなくてスタンダード戦。ようするに樂團<sup>バンド</sup>一人ともがリングの上にいるルールだ」

どう考へても相手は倉守を率先して狙つてくる。どちらがウト力をするにしてもかなり苦戦を強いられる。

「そ、そっか」

「だから実技で取れない分を筆記の方で稼いでおかないとかなり不味い」

まさか俺がこの心配をする事が来るとは思つていなかつた。

「最悪退学になる」

殺すのも殺されるのも日常茶飯事な魔法高校ではあるが、別に学校側だつてそれを望んでいるわけではない。

その証拠の一つとしてあげられるのが、退学させるラインが異様に高いことだ。

他の魔法学校なら成績が少し低い程度の扱いで済むような事でもここでは命取り、魔法を使う才能が無いのなら、死ぬ前に帰つて貢うのがこの学校の嗜み。

そんなありがたいのかありがたくないのか全然解らない制度だ。個人的に言わせて貰えれば、退学を阻止するために人殺しへと拍車がかかるシステムであるとも思う。

まあ実技が駄目でも平常点と筆記の方の試験点を取つておけば、そこまで気にする物ではない。

さすがに十五戦十五敗をするのは難しいからね。

「倉守大丈夫か？ ちょっと顔色が悪いように思えるぞ」  
いや、顔色が悪いというか死んでるというか。

「なあ倉守、最近は受業聞いてるよな」  
「こくこくと顔を上下に倉守は振つた。

「確かに最初の頃寝てたから、平常点は悪いと思うが、テストでき

つちり 「

ここまで詰つて俺はどじつこの事態になつているのかよつやく気づいた。

「もしかして受業全然解つてなかつた?」

「うん……」

もつと早くに気づいていてもおかしくなかつた事態なのに。

倉守は魔法に興味が無い。それはつまり本来この学校に来るような生徒だったら知つていて当たり前のような知識が無いと言つこと。それが受業そのものにだつて当てはまると言つこと。

そして倉守は序盤の授業をずっと寝ていたと言つこと。

本来、一年生に成つたばかりの受業はさほど難しくはない。しかしそれは魔法に興味があればの話だ。

「どうしてそつ言つ」とをちゃんと言つてくれないんだよー。」

「テスト前に一夜漬けしておけば、赤点ギリギリぐらこの点数は取れるつて思つてたの! あたしつて退学なのー?」  
俺はその疑問に答えることが出来なかつた。

俺は一緒にトレーニングをすると約束したし、それを守つてゐし、今後も続けてこいひつとも思つてゐる。

しかしだ。

それは魔法使いとしての実践的なトレーニングの話であつて、勉強の話ではない。

「そこを何とか」

手のひらを合わせて頼み込まれた。

勉強を教えて上げられるぐらいの成績はあるし、今からテスト勉強をするなら満点とはいかなくても赤点を回避するぐらいならできるだらうけど、

俺としては問題が一つある。

〔一九〕

教えなれば赤点で退学して、樹里が和音になるのでは？

頑張つてる相手を殺すのはやりたいとは思わないが、今までの怠惰のツケが回つてきて勝手に退学になるのまで面倒を見る必要がどこにあるのだらうか？

とは言つても、見殺しつてのもまた違つた。

「友達に教えて貰つたらどうだ？」

まあ勉強なんできちんと量をこなせば出来るのだ。俺が教えてやる必要はない。

「……嫌」

「どうして？」

「……」

俺は倉守を見る。倉守は俺から逃げるよひに視線をそらす。

「そそつと口が動いた。

「あたし……あんた以外に友達いないし……」

そう言えば前にぶつちやけてたな友達いないって、でもそれは秘密の特訓をして、授業中寝てたからってのが理由じゃないのか？

あれから一ヶ月だぜ?

「喋るの苦手……」

「そう言えば言つてたな」

俺としてはそれも理由には入らないと思つけど。個々人の感覚にまで口だししていってはいつまで経つてもきりがないか。

「解つたよ。俺がお前の友達を呼んでやるよ」

「だからいねーって」

「それ聞いたら悲しむだろうな」

俺は携帯電話を手に取つた。

「と言つわけで、樹里先生をお呼びしました」

たぶん友達と言つても良いと思う。倉守がどう思つが俺の知つた事じやないが、樹里なら友達と言つてくれるだろつ。それに成績もかなり良い。そう言つわけで、俺と倉守の部屋で勉強会をするから来いと呼んだのだ。

「みんなで勉強会するのつて初めてだから楽しみ」

「そういうや、風間はどうした?」

良かつたら風間も呼んでくれ。と俺は頼んでいたのだけど。

「風間ちゃんはまた私のミルちゃんに乗つて失踪中です……」

ミルちゃんは樹里の使つてる笄の名前だ。笄の名称ミルキー・ウェイから取つてる。

「一応メールしたので、来るかも知れませんけど期待しないでくださいね」

樹里はそう言つと持つてきた教科書の類を机に広げた。

「なあ」

倉守は俺に耳打ちする。

「ん?」

「氷河はあんたの頼みだからあたし勉強教えてるんであつて、あた

しを友達だと思つて教えてくれる訳じゃないだろ?」

「お前には樹里が淑やかな奴に見えると思うだろ? が、あいつは嫌なときはきちんと嫌と否定するから安心しろ」

倉守は納得してなをそつた顔をしていた。

成績上位者が「人もいるなら勉強するのも楽だろ?」

と言う俺の憶測はあまりにも楽観的な事がすぐに判明した。

「えーっとそこは何となく?」

「数学で何となくなんて言わわれても…」

樹里は教えるのが絶望的にへタだった。

さきほどからずつとこの調子である。基本的に答えを一瞬で導き出すのだが、その答えを導き出すまでの過程を一切説明できない。樹里の感覚だと歩くのを教えるのも、数学を教えるのも大して変わらないのかも知れない。

「じゃあこっちの問題は?」

「ここに補助線引いたら答え出るよ」

「そこに補助線を引くまでの過程は?」

「なんとなく」

そう言えば、俺は樹里が家で勉強をしているところを見たことが無い。俺が予習している隣で、平然とレースゲームとかよくやつてたよな。

俺が教えるべき何だろ? けど、なぜか樹里はノリノリで教えてるから止めるのも憚られる。

倉守そんな顔で睨むなよ! 、

「みみちゃんビデオしたの?」

「べつに…」

「あたし、火野の奴から数学教わりたいなあ…」

「ダメ」

「ひの  
」

「私が教えるよ」

樹里は笑顔を作る。微妙に顔を傾けてその傾きにそつて髪の毛が綺麗になびく。

それと同じように倉守は樹里になびくしかなかった。

問題点がそれだけならば、明日から樹里を呼ばなければどうにかなつたのだろう。

「これ全部暗記するの？」

倉守の声が死んだ。

「そうだよ？」

樹里は何で？つて疑問符を頭に浮かべる。

数学に関しては倉守は被害者だと思ったが、今回に関しては俺は樹里の味方だ。

数学の教え方がダメなら数学以外の教科を教えて貰おうと言いつつまでは良かった。教えて貰うのも樹里の専門分野である魔法実技なのも理に適つてゐる。

問題はその量だった。

「氷河はいつ頃覚えたの？」

「七歳の時には全属性の効果の序列も覚えてたよ」

俺もそれぐらいには属性の配列を覚えていた記憶がある。

実技魔法はとにかく量が多いらしい。

一般的な生徒は魔法に興味が有るなり、魔法に触れるタイミングが多いので、覚えると言つよりはいつの間にか記憶してしまつような物だ。

だから、量が多いと思う」とすら無かつた。

「じゃあ、魔法道具破壊の優劣は？」

「一位が光、二位が木、それ以外の属性は魔法道具の破壊が一切出来ない」

「火と木の体内魔法の効果は両方共に身体強化であるがその違いは

？」

「火は筋肉量の増強で、木は筋肉量、反射神経、自然治癒の複合」  
「では木の体内魔法と同じ効果を他の属性で作ろうとしたとき、どの属性をあわせればいいでしょ？」

「火と雷と水に、火と水が相反属性なので火と水の中和属性である土も加える。ただし全部を複合せずに独奏魔法として使うのならば土属性は要らない」

「……なんでこんなのはすらすらいえんのよ」

A・すらすら言えるような状況じゃないと戦いにならないから。つまり必死になつて暗記するような物ではなくて、戦闘によつて培つていく物が実技魔法のテストで問われるのだ。

「大丈夫だよ単独の独奏魔法と二つの組み合わせの重奏魔法だけならそんなに難しくないよ」

ただしそこに遅延魔法の発動条件と、全属性の独奏魔法と重奏魔法の体内魔法、体外魔法の効果、同一の事が出来る属性の優劣の順序、各属性の中和属性、補強属性、相反属性の暗記も必要になつてくる。

「これぐらいのこと、魔法使いでなくともウイザード好きを称する人間ならば、知つてもおかしくないレベルの事であつて、学園側もそれを理解して一年生に優しくするつもりで出題してるのである。

もつとも、その優しさが届いていない一年生が目の前にいるけど。

倉守が要點をノートにまとめ初めて三十分がたつた頃、そろそろ夕飯時だ。昔はお互いに別々の物を食べていたが、今では俺がまとめて作ることになつていて、倉守が殺人料理の使い手であつたりとか、俺が家庭的な男だつたりするわけでもない。

俺がジャンケンに負けたからだ。

さて何を作ろうかと冷蔵庫を開けた時、チャイムが鳴つた。

俺は通販で買ったアニメのBDだと勝手に判断して扉を開いた。

そこにいたのは活発そつな少女であった。

「夕飯食べに来たぜ！」

風間恋愛だつた。風間は表情豊かでテンション高めの女の子で、単純明快ストレートな性格をしている。ちょっとたれ気味の瞳をしており、ショートにまとめた髪をおでこに掛からないようにヘアピンで留めている。

「うつ書くとどうでも」にそなう少女に見えるが、倉守の和音と言うだけで、そんじょそこらにいるわけがない。

事実、彼女は風間魔法工業社長令嬢だ。

風間恋愛は間の抜けた笑顔をしながら、返事を待たずに勝手に上がつてきた。

「あたしの盗むようのおやつもないし、自分で作るのも面倒だし、勉強会つても楽しそうに見えたから来ちゃつたぜ」

「別に盗ませるためじゃないのに」

「でも食べ物つて食べられるためにあるんだから、あたしが食べても良くね？」

「ぜんぜんよくない！」

「でも篳つて乗られる為に」

「何で私のミルちゃんに乗りたがるのー？」

なお、樹里愛用の篳ミルキーウェイは風間魔法工業製だ。

「あたし夕飯はカレーが良いなカレーが」

勝手を知つた我が家のようにレンアイはテレビを点ける。これで、日本有数企業社長の末娘なのだから恐れ入る。

「解つたよ力……レンアイちゃんシチューだな」

材料的にも出来るので俺はレンアイの要求をのむことにした。

「だから、あたしを名前でよぶんじゃねーつて！ あたしを呼ぶときは風間ちゃんにしろと言つてんだろ」

確かに恋愛ちゃんつて名前を好きになるのは難しいだらうな。本にあるのは恋愛ではなくて、憐哀だ。

「それで風間も勉強に来たんだろ？」

その割には勉強道具を一切持つてきるよりには見えなかつた。

「もちろん」

風間は黄色のポシェットからティスクケースを取り出して、俺の顔面に見せつける。

「マリオパーティしようよマリオパーティ！」

「桃鉄じゃなくて？」

樹里は頻繁に桃鉄勝負を挑まれるとか俺に話していたのだが。

「時代はマリオパーティだね」

そんな事をかしこまつた表情で言われても、俺としては対応に困る。と言うか俺にコントローラー渡されても困る。

俺だつて困惑しているけれど、この状況を黙つて見過せないのは俺ではない。

「風間、あたし勉強中なの、ちょっと黙つて」

倉守だ。倉守は不機嫌さを隠そつともせずに、言葉に力を込めていた。

「おいおい、勉強会で人が集まってるのに、勉強するなんてバカのすることだぞ？ それにテストまで時間あるしもあ。ここは全力で遊ぶべきだと思うよあたしや」

「あたしはそのバカだからしないと本当に不味いのよ」

「はいはいお互いにそこまで。樹里シチューを作ってくれ、倉守は寝室の方に行つてくれ、風間お前の相手は俺だ」

俺は風間からコントローラーを受け取る。倉守に勉強しやすい環境を整える為には誰か一人が風間とのゲーム勝負を受けなければならぬ。

決して俺がやりたい訳ではない。

みんなで夕食を食べゲームをして遊ぶ。どこにでもある日常的な光景だ。テスト前であることを除けばな。

この日以降も倉守はテスト勉強に励んではいたし、徐々に風間は協力的に、樹里も協力的に（あるいは非協力的にと言う表現でもあってはいる）なつていった。

倉守に勉強を教える役割は消去法で俺になつた。倉守から見れば俺は俺で説明が多すぎて解らん。との事だが、説明が無くて解らないのと、説明する氣すら無いのとではさすがに選択する余地は無い。今までの遅れを取り戻すために、夜遅くまで勉学に励んだ。

生活リズムはまた微妙に乱れていくが、しょうがない物と俺はあきらめてしまった。

それがいけなかつた。

試験初日。倉守は風邪を引いた。

「別にこんな風邪に入らないし」

と鼻声で喋る人間の言つことを一体どれだけの人が信じるだらうか？

「風邪薬飲んでおけ」

俺はふらつく倉守を椅子に座らせ、体温計で熱を測らせた。

これに関しては俺の失態だ。コーチだの何だのと言つておきながら、初歩で重要な体調管理が出来ないだなんて。

「魔法でどうにかならねえ？」

「風邪は無理だ。」

魔法にはふれられない部分も多い。風邪はその代表的な例だ。

「カソニングは？」

「テスト中は結合指輪の着用禁止だ」

魔法を使ってのカソニングは難しいが、古典的なカソニングは不

可能と言い切れる。教師達は一流の魔法使いぞろいだ。易々と見抜くだろう。

「じゃあぼーっとするのだけでもどうにかならない」

「……それは出来るかも知れない」

水属性の体内魔法に精神を落ち着かせると言うのがある。逆に心を弄るのはそれぐらいしか存在しない。他の精神や記憶を弄るには、禁忌属性の心属性が必須になる。

「テスト直前に樹里に頼んで掛けて貰うから安心しろ」

「わかった」

体温計の音がなった。俺は倉守から奪い取る。倉守なら一度や一度ぐらい詐称してあたしは元気なんだから病人あつかいすんな。と言出しかねない。

体温計で示された温度は38度9分だった。

倉守は最悪のコンディションの中でも必死に問題を解いた。家に帰ると、そのまま布団に飛び込み、テスト問題の復習などできる様子ではない。

俺は倉守を医者に連れて行つたり、部屋の掃除などの分担部分の作業も行つた。俺だけはどうしようもない部分は樹里と風間の手を借りた。

倉守に体を休める時間を作つて上げたからだ。

親の心子知らずと言つ言葉があるが、まさにそんな状況だった。

俺の作った時間で倉守がやつた事と言えば、  
新たなテスト対策だった。

テスト最終日、テスト終了後俺は倉守と一緒にパソコンの画面を見つめていた。

倉守の風邪はようやく治りかけたが、一度受けてしまつたテストの点は取り戻すことが出来ない。

自己採点の結果はあまり芳しいとは言えない。赤点のラインを超

えてはいるが、依然として退学は口を大きく開いて待っている。

そこから逃げ出せるかどうかはこれから実技試験の対戦相手によって決まると言つて良かった。俺の推測する限りだと、八勝七敗。ここが倉守にさせられたボーダーラインだ。

俺は懇親の力を込めてマウスをクリックした。テキストからテキストへページが飛んでいく。俺はそのリストに並ぶ名前を一つ一つ確認していく、対戦相手の合奏バンド、勝てるかどうかの憶測もたてた。俺の予想は七勝七敗だった。

どうにか成るかも知れない。

俺は希望を持ちながらマウスをスクロールした。  
実技テスト最終日俺たちが戦う最後の楽団は、  
氷河樹里と風間恋愛の二人だった。  
予想される俺と倉守の成績は七勝八敗。  
奇跡が必要だと突きつけられた瞬間だった。

この章は大きく書き直すかも知れません。  
(色々はしょりすぎた)

「俺は落胆のため息を吐いた。

「でも追加で一勝ぐらいならどうにかならない?」

対して退学がほぼ確定になつた倉守はあつけらかんとしていた。

「現実的な見方をすると4勝11敗ぐらいの所を、かなりひいき目で見て7勝8敗だ」

倉守が苦虫をかみ潰したような顔になる。よつやく事態を理解したらしい。

「あたしは絶対退学なんてしないから」

「俺だつて、お前をそのまんま退学させる気は無い」

ここまで来たら最後まであらがつてみせるぞ。

魔法高校の期末試験は少々歪な形をしている。

単純に実力を測りたいのならば、事前に組み合わせを十五組作るのではなくて、模擬戦の勝率を元に最初の相手を決めた後は、勝率で判断していく方が強さの順序が解つていくだらう。もちろん学校側だつてそれぐらい認識済みだらう。では何故こんな変則的な方法をとるのかと言えば、賭博の対象だからだ。

世界中に配信されると共に、賭の対象にもなつていて。そのため事前に人気が出そうな組み合わせを意図的に作つていいのだ。

十五戦目の樹里と風間の楽団も俺と樹里が元々楽団で無敵の強さを誇つっていたからだらう。

氷河のストーム

火野の異端児

の直接対決。

倉守の退学が掛かつていなかつたら俺と樹里も喜んで戦つてゐる所だ。

しかし樹里だつてこの状況を知つている以上。複雑な心境だろう。  
「氷河に勝ち譲つて貰うつてできない？」

「八百長がばれたら四人共に退学になるし、俺が認めない。もう模擬戦のような事をするのはごめんだ」

それに今回の事にこれ以上倉守と風間を巻き込むのは気が引ける。  
俺と倉守は樂団<sup>バンド</sup>で一蓮托生な関係だけど、樹里と風間は関係が無い。

「じゃあどうすんのよ？」

「正攻法で駄目なら搦め手で行くしかない」

「賭博なんてしてゐる余裕ないでしょ」

「賭博しに来たわけじゃないぞ」

俺たちは魔法特区内で一番有名なブックメーカーの販売所に來ていた。店内には複数の大型液晶テレビに飲食物の販売もしており、純粋にウィザードの観戦だけを楽しむことも出来る。

今日から賭けが開始なので、店内は人で賑わっている。

誰に賭博するか悩んでいる青年、賭博なんて関係なしに食事をしている女子二人組、俺の試合に賭けに來たからなのか俺に手を振つくる大学生の姿などがあつた。

俺の探している男は賑わつてゐる店内の中でも一際人の集まる場所の中心にいた。

予想屋だ。勝敗の予想や、注目されてゐる選手の情報を買つたり出来る。

魔法特区内においては、いくらかの上納金と審査を通り抜けると合法的に出来る職業らしい。

俺が近づくと予想屋の男の方から話しかけてきた。

「やあ火野の旦那何か入り用で？」

「俺が期末試験で戦う樂団全員分のデータが欲しい」

一部の生徒、例えば樹里なんかは別に買わなくても模擬戦で見て

いるから知っているのだけれど、ここまで来ると一人一人減つたところで値段も変わらないだろ。

「金額がシャレになりませんよ？」

「シャレでこんな事を言う人間に見えるのか？」

予想屋は豪快に笑う。間違つたことをしてゐみたいで不快だ。

「いやいやいや、中々スゲーゼ。戦つてゐのを見てる限りだとじみーな感じに見えたけど、やるときはやるな。良じよ。ただで、全部調べてやる」

「本当にタダでいいのか？」

俺は高校生一ヶ月のバイト代が全部吹つ飛びぐらいの金額を予想していたのだが。

「別にタダでいいさ。じつぢまじつちで貴重な情報をいただいた訳だからな」

なるほど。俺が他の生徒の情報を必死になつて集めていると言うことも情報になるのか、自分がある程度有名だから出来る裏技みたいな物か。

一拳一動がそうやつて売買されているのはあまり良い気分ではないけど、そうも言つてられないか。

しかし、これはむしろチャンスだよな？

「ところで、リンクリンク結合指輪をオーダーメイドで作りたいのだけど、どこか良い店か生徒を知らないだろうか？」

結合指輪は学校側から配布されている基本的な物以外も使用が認められている。例えば、炎属性を伝達するのに特化した指輪なんてのをつても良い。

「どんなリンクリンク結合指輪？」

「炎属性に特化した指輪が欲しい」

「それなら良い店を知つてますよ。お代はいりませんつて、これぐらいサービスサービス。だからこひいきよろしく」

情報屋がニタつと笑うのを確認した。

これで、倉守の炎属性で戦うと憶測をたてるはずだ。

じゃあ帰るかな。と俺があたりを見回すと、倉守は受付で少々もめていた。

「何してるんだよお前」

「ぜつてーに負けないって気合いを入れるために自分の試合を買おうとしたら」

「試合の関係者は『購入になれません』受付嬢は苦笑いをしていた。

俺はブックメーカーで倉守と別れた後に、情報屋に教えられた店で炎属性特化型の結合指輪（リングクリング）を一つ購入した。

一つと言つのがポイントだ。

一つは普通に使わせて貰う。倉守が今後他の属性を使えるようになつたとしても、炎属性が一番強い属性であるのは変わらない以上、炎属性を中心とした戦略を立てていくしかない。

もう一つは特長の無いの結合指輪（リングクリング）として使えるように細工する。魔法道具（アーティファクト）の製造は俺の専門分野外だが、樹里に協力してもらえばこれぐらいは可能だ。

こうすれば、一回限定の入力出力の奇襲的入れ替えが可能だ。

さらに俺はスープアート（インアート）で包丁も購入した。

期末試験では魔法道具（アーティファクト）で無い道具の持ち込みは認可されている。と言つても、手に持てる範囲限定と言う注釈もあるし、持ち込むような生徒はあまり居ない。

なぜそんなルールがあるのかと言えば、風属性を使う生徒が、魔法で操る物を持参してくる為だ。

俺も風属性と水属性が強い樹里の和音（コード）をしていたので解るが、風単体で強力な攻撃を出来るようになるには、かなりの熟練が必要になる。俺もそこまでの実力は無いので、水の中に研磨剤を入れてウオーターカッターのようにして使つていた。

もし倉守が包丁を持つてリングに上がつてくれれば、相手は自分の身を守るために包丁を握つてくれたと勘違いしてくれるだろう。

そこで火属性特化の結合指輪リングクリンクリングを細工して作った通常の結合指輪リングクリンクリングを使って入れ替える。

1回だけならこれで勝利できるはずだ。

後は相手の情報を見て個別に対策を取りながら、倉守が劇的に成長してくれるのを祈るしかない。

1学期期末試験 美海▽S樹里編4（美海視点）（前書き）

書き分け出来ているとは思っていますが、一応サブタイトルに誰の視点かを表記しました。

## 1学期期末試験 美海VS樹里編4（美海視点）

「あたしまだがんばれた」

だつて、今のが実質最後の試合だつたし。

「左手足を物理的にもぎ取られた状態で言われても説得力ねえからな」

あたしは今治療室で腕と足の接着作業をしているところだ。肘と膝の先が無くなつていて、見ているだけで痛々しい。

どんな助かりそうに見えない傷でも、何事も無かつたかのように治しちまうから魔法つてすげえ。今だつて本来なら喋れる余裕なんて無いほど痛いはずなのに、あたしはかゆみ一つ感じてない。

魔法によつて受けた傷の場合は傷の切断面に魔法痕が生じてなんてむずかしいことを火野は前に言つてたけど、要するに魔法による傷は魔法で簡単に治せるつてことらしい。

「大体お前が死んだら意味ねえだろ」

「あれぐらいじゃ死なねえつて」

「ここ数日で傷に対してのモラルつて言つか、感覚が著しく低下してゐみたいだから言つておくが首が飛んだらさすがに治せないからな。確かに、死してもなお勝利つてなら、あの後、魔法生物<sup>キメラ</sup>が首に食らいついてくるハズだから入力出力<sup>イン・アウト</sup>を逆転させて、お前が魔法生物<sup>ラ</sup>を魔法でぶつ飛ばしての合間に俺が本体の方をぶん殴ればいけたはずだ。ただしお前は治療を受ける前に死ぬ」

こいつの言つことだからたぶんホントなんだらつてのは解るけどあたしは納得できない。

だつて、次の試合相手は、

「樹里と風間の事なら、俺がどうにかする」

あたしの思考を読み取つたかのように火野は喋つた。

「どうにかつてどうすんの？」

「俺、明日樹里にプロポーズすることになるかも知れない」

悟りを開いたみたいにすがすがしい顔して。

氷河は恥ずかしがり屋だから、みんなの前でしかも大人数が見てる試合でプロポーズなんてしたらぜつてー恥ずかしがるだろーけど。「その手段つて失敗したんじゃないの?」

これから対樹里戦の必殺をやる。俺の知将ぶりを見ろ! と言つた矢先にやつたことが『樹里綺麗だね』って氷河に言つことだつた。何やつてんのよバカップル。

氷河は氷河で、『髪は乙女の命ですから綺麗なのは当然だよ』と華麗に流してたし。

「始業式の時はうまくいったのに……もつとインパクトのでかい一言なら」

「嫌いだーって言えば?」

「……言えないよ。例え冗談でも」

どこか遠くを見るように、懐かしむように火野は言つた。昔喧嘩でもしたのだとあたしは考える事にした。

「とにかくだ。樹里を五秒ほど止めることが出来るなら勝てる!」

「何で普通にやつて勝てないのに五秒だけ止められれば勝てるって自信満々に言えるの?」

「俺と樹里が何年間幼なじみやつてると思つ? 弱点なんて予想屋に聞くまでもなく把握してる」

「そだねー。知将さんに戦略を全部まかせてあたしはトレーニングするよ」

監督官に動かしてみてと言われたのであたしは繋げられた手と足を動かしてみる。

これがちょっと前まであたしから外れていて、血まみれになつていたのが信じられないほどよく動く。

「無理すんなよ」

「無理なんかしてねーし」

あたしは火野に背を向けて治療室を後にした。

あたしは「」の学校に入つて良かつたなど素直に思える物がほとんど無い。

魔法は今だつて嫌いだし、いまいちクラスになじめないし、火野の奴も……まあころそーとしてきたけど、トレーニング付き合つてくれるし、看病してくれたし、最初に威圧的に接したことはあるしも後悔してる。

うん。嫌いじゃないかな。

でも、同居してゐるのに女として一切見られないのは紳士的なのか、あたしに女としての魅力が無いのか。…………複雑。いいや、氷河一筋つて事にしておこ。（それもなんか違う気がするのはなぜ？）嫌いなことをあげるだけなら三時間ぶつとおしで話したつてきっと好きないと思つけど、好きなことはたつた一つしか無い。

走ること。

これだけは楽しいとあたしは胸を張れる。

最初はつまんなかったし、今でも走つててつらくなる瞬間があるけど、走り終わつた後のタイムを見るのが好き、そのタイムが縮まつていくのが好き、くたくたになつてるけど体に満ちる充実感が好き。

とにかく楽しくてしょうがない。

あたしはイヤホンを耳に掛けてミュージックプレイヤー（火野からおふるを貰つた）で音楽を流しながらいつものコースを走り始める。

耳に流れ込む音楽はあたしの暗く沈み込んだ気持ちを持ち上げてくれない。ランニングの疲れはあたしを無意識に運んでくれない。

7勝7敗。

次の試合であたしの退学が決まる。

風邪を引いたときに何度も悪夢で見た光景が、現実の物になつてしまつ。

悪夢のバリエーションはいくらかあったけど、最後にはお兄ちゃんが出てきて 。

あたしは看病されていた時の事を思い出しながら走り始める。

＊＊＊

あたしは風邪を引いてるときに眠りたくなかつた。  
弱いあたしなんて見せたくない。

起きたらあたしは泣いていて、あいつは本気で心配する。  
「お前は病人なんだから寝るのが仕事だ！ テストはその後だ」  
病院に連れて行かれた後、火野はあたしを強引に布団に寝かしつけて、冷却シートをあたしのおでこに貼つた。  
「テスト勉強しないと退学しちゃうじやん」

嘘だつた。眠りたくなかつた。夢を見たくなかつた。

「俺がお前を絶対に退学させない。しかしお前の風邪まで俺は治せん。だから大人しく寝てろ」

「移せば治るかも」

「軽口叩けるぐらいだ移さなくとも余裕だな。だからお前は何も気にせず寝ていろ」

「…………あたしみたいなバカ、退学するに決まってるんだからあきらめれば」

「風邪引いてる奴がバカな訳ないだろ？ それに、お前がバカだつたとしても、火野一族でも歴代最強の火野昇君の和音は何の不手際か無能でしたなんて語られたくないんだよ。お前には最強とは言われなくとも、二つ名貰えるぐらいには強くなつて貰う

「こうそーとしたくせに」

「方針転換だ！ だからお前が退学したかつたとしても俺は絶対にさせないから、覚悟しろ」

「へいへい」

「とりあえず俺に着替えさせられるのは不服だらつから樹里はさつき呼んだ。今のところ何かして欲しい」とあるか？」

して欲しい」と……あたしはほんやりとした思考で考える。

「……体拭いて欲しい」

火野がすげー驚いてた。驚き方が氷河に似ていて、ちよつと笑了た。

そしてあたしはどうして火野が驚いたのかをようやく理解した。

この状況だと、火野があたしの体を拭くことになるじゃん。

そこまで頭が回らなかつた。ただ、すっげー汗かいてるからどうにかしたいなーって思つただけなのに。

「お、お前！？」

「やつてくれるんじゃないの？」

普段のあたしなら上手くかわせたんだらつけど、まことにんな事を言つちやつような頭がかわせるわけが無い。

おかげでお互いに引っ込むわけにはいかなくなつてしまつた。あたしはあいつに見られないように、制服のブレザーを脱いで、ブラを外した。

背中に適温のタオルが当たる。

それがすーと上から下に流れしていく。意外とうまい。

思考どころか羞恥心まで麻痺してたからそんなに恥ずかしくなかつた。

ただ、

「チャイム押しても反応が無いから、勝手におじやまさせて貰いましたけど、ノボルは何をしてるのかな？」

あたしの体を拭いてる場面を見られて、天使のような笑顔をしている氷河に連れ出されたから、火野には悪いことをしたと思つ。

あたしは氷河に手伝つて貰つてパジャマに着替えさせられる  
がままに看病された。（へタするとあたしも火野みたいにされそう  
だし）

「ねえ悪夢を見た時つてどうしてる」  
あたしを看病し忽くして満足している氷河に聞いてしまつた。  
「ほつとする。だつて現実じやないでしょ？ 現実だつたらノボル  
がきつと助けてくれるから」

「ふーん」

まさかこの話で惚氣られるとは思わなかつた。

火野が助けるのは、それが氷河だからなんだとあたしは思う。今  
のあたしを助けよつとしてくれるのも結局自分の名声のためだし、  
きつと名聲とか関係なく、あたしがピンチになつても助けてくれ  
ねーんだろうな。

だつてあいつ結局の所は氷河の王子様だし、氷河は典型的なお姫  
様みたいな女の子だし。

氷河に比べたらあたしなんてそじらにいる村娘だ。

それに王子様は

「体調が悪いときは悪夢つて見やすいと思います。でも、それは現  
実じやないのですから、それに私もノボルもそばにいるから、だか  
ら安心して眠つて欲しいな」

「へーい」

その時だけは夢を見ることなく、眠れたと思つ。

\*\*\*

ランニングしていくても合間も思考がぐるぐるとループする。しか

も徐々に悪い方へ悪い方へと流されていく。

悪夢の事を考えて、風邪を引いたときの事を考えて、試験の事を考えて、退学の事を考えて

試験の結果は全部あたしのせいだ。

結局あたしがこの十四試合でやつたことと言えば、眼鏡からコンタクトに変えたこと（戦闘中に眼鏡を落とすと致命的だから）、包丁で牽制したこと、いつもと同じ内容のトレーニング。

負けた理由を突き詰めるとほとんどあたしが原因だし。

火野のやつた小細工も何度か成功してるし、なんだかんだ言ってあいつ最強を自称してるだけあるんだよな。

……退学、しょうがないかも。

あたしには過ぎた野望だつたんだ。

復讐なんて。

あたしは折り返し地点に来たここに来ると気分が盛り上がる。うおーつて叫びたくなる。叫ばないけど。恥ずかしいから。

「やあ倉守美海さん」

「うお！」

叫ぶつもりは全然無かつたけど、叫ぶことになってしまった。だつていきなり後ろから肩叩かれたら驚くでしょ？

「驚かせてすまない。音楽を聴いているみたいだから直接触らないと解らないかも知れないと思ったのだが、面白い。最近の女の子にしてみればこれもセクハラの範疇なのかも知れないね。ボクとした事が失態だ。しかもつまらない失態だ」

氷河氷柱先生だ。火野が言うには関わっちゃいけない奴。氷河が

言うには面白いおじさん。あたしにとっては他のクラスの先生。

「なんですか？」

肩を叩かれたとかそんなの関係なく、ランニングの邪魔をされるのがすっげー不愉快。

「そんな怖そうな顔をしないでくれ」

「解りました。で、何のようですか？」

「明日の試合勝ちたいとは思わないかね？」

「勝てるならね」

「なら氷河に伝わる精神直結と呼ばれる特訓法をやってみないか？」  
特殊な結合指輪(リンクリング)を使って自らの心象風景に入り込み、アンブリッファイア転調回路を改善する物だ。短期間で驚くほど強くなれる。と言つても実力的に樹里や恋愛に並ぶわけじゃない。それでも一瞬の隙を作るぐらいなら出来るだろう。火野君ならその隙を突いて一方的に不利な試合をイーブンぐらいには持つて行ける

「遠慮します」

そりや勝ちたいけどさ。

「何で氷河のおじさんがあたしの味方すんのさ」

教師なんだしこういうときは公平に接するんじゃない？ それが出来なくとも、肩入れするなら姪っ子でしょ？ どう考へてもおかしい。

「なるほど疑つてるのか。確かに胡散臭い話にしか聞こえないだろうね。まず樹里に肩入れする為に君を罠にはめようとしてると思ってるのなら、それはあり得ない。

考えてみた前、そんな事しなくても樹里が勝つのは一目瞭然下手に肩入れして、問題がでてしまった時の方がリスクが大きい。単純にボクが君に肩入れするのはそちらの方が面白いからだよ。

それに特訓イベントなんて、そう滅多に出会える物じゃない。

瞬にして強くなる弟子、少年漫画みたいでドキドキするね  
『面白さだけで行動するから厄介だ』火野はそんなこと言つてたつ  
け。

「……解ったやる」

今はその面白さだけで行動する理不尽をどこで頼らなければ氷河になんて勝てっこない。

「そう言つてくれると思つてたよ。でもその前に一つ確認したい。これはとても大事なことだ。

倉守美海さん、死ぬ覚悟は出来るかい？

氷河に伝わる特訓方法は非常に危険でね。死ぬ可能性も十二分にある。だからその事を理解してから挑んで欲しい」

「死ぬ覚悟なんてこの学校に来てる時点で出来る」

ほんとは嘘だ。

だつてあたしはまだ死ねない。

まだ退学できない。

だからあたしは死なないし退学もしない。

特訓にも打ち勝つて、氷河と風間を倒す。

ついに倉守がカツカレーの前に敵前逃亡しやがった。

願掛けぐらいいいだろ？ 一応カツカレー、カツ丼、トンカツで微妙に変えて出してるんだし、この試合は勝ちたって試合の時にしか出してないし、つまり大半の試合の前日に出したって事でもあるけど。

しようがないので、俺は一人でカツカレーを食べると、倉守の分をラップして冷蔵庫の中につっこんだ。

絶対に退学させないと大見得を切つてしまつてているけれど、現実問題かなり難しい。八百長も一応考慮に入れてみたが、全勝する気満々の風間が勝ちを譲つてくれるわけもないし、お金の力で買収できるような相手でもない。

となると、やはり樹里をどうにかしないといけないのだが……悩みに悩んでもしようがないので、気分転換にお風呂に入り、気分転換に一人でゲームをして、気分転換に と、時間だけ浪費されていく。

「好きだ結婚しよう」

「好きだ 結婚しよう」

「好きだ！！！！！」

自分の声がICレコーダーから聞こえる。

どのイントネーションが良いかを調べるために録音して聞き直している。

言うだけでも精神が削れしていくのに、それを録音して一人で聞いていると言つ事實がさらに俺の精神を削り取つていく。

鳥肌がヒドイデス。

チキン肌と言わずにそのまま鳥になつて国外逃亡したい。

それがダメなら焼き鳥になりたい。出来れば塩で。駄目だ……思考が色々狂つてきてる。

思考を変えなければいけない。

別に樹里を五秒止めるだけなら、言葉じゃなくても良いはずだ。樹里の苦手なカエルを投げつけ…どうやってカエルを確保してそれを樹里に投げつければ良いんだ？ 途中で風間に打ち落とされるのが落ちだ。

そうだ。樹里と風間の部屋に大量のカエルをぶちまければ、戦意喪失したり、あわよくば遅刻したりするのでは無いか？ 模擬戦と違つて、後日再戦なんて優しいシステムなんて無いのだし。

そうか遅刻させれば良いのか！

他の対戦相手は友好関係に無かつたから出来なかつたが、樹里と風間が相手なら出来るはずだ。それに明日の試合は朝の十時とまだ遅刻しやすいタイミングだ。昼の一時とか三時とかは難しいが十時ならいける。

俺は「樹里の所に行つてくる。火野昇」と書き置きして樹里の家に向かつた。

事前連絡無しで樹里の所に尋ねたら風間が不審がるかと思つたが、そんなことは無くすんなり上がらせて貰えた。

言い訳も一応考えただけに肩すかしだ。

「喰うかチーズカツカレー？ あたしと樹里の分しかカツ買つてないからチーズカレーだけど」

樹里と風間は遅めの夕食を取つてゐる所だつた。しかもメニューがほぼ一緒だ。

「遠慮するよ…食べてきたし」

まさかチーズが乗つてゐるか乗つていなかつたが、負けた気分になるほど落ち込んでいるとは思わなかつたよ。

「てめえ！また名前で呼ぼうとしただろ！？」

「一言も言つてないどころか思つてもいなかつたぞー・レンアイちゃん！」

「だから名前で呼ぶな！」

じゃあ名前を呼んで欲しそうなフリも止めて欲しい。

「それにしてもまさかこんな所で勝負を仕掛けてくるとは、あたしは思わなかつたよ。ここ数週間だけで魔法使いつてか策士としての評判がウナギのぼり、いや、鯉のぼりなだけあるぜ」

まさか明日の試合を遅刻させるために、田覚まし時計の時間をずらそうとしていることがバレてるのか？

「マリオパーティーであたしを完敗させる事によつて精神的打撃を与えて翌日 の試験であたしをボツコボコにするんだろ？」

そんな自信満々にコントローラーを握つても俺はやらないからな。

「…………そんな事で精神的打撃を受けるな！！」

「でも、ノボリゅんだつてチーズカツカレーを見たとき絶望してた！ モンドセレクションに受賞できそうなレベルで絶望してた！ や～いや～いトンカツもチーズも買えないレベルの貧乏人～～ん！」

「ノボリゅんって何だよ！？ しかも絶望なんてしてねえ！」

「ねえねえ、ウナギのぼりは解るけど、評判が鯉のぼりってどういうこと？」

「めんどくさそうだからわざわざ無視したボケを一々回収しないでくれ！」

「策士ノボ太郎をボツコボコにしたあたしが詳しく解説しちゃうただな」

「するな！！」

仲裁でもするよつに俺の携帯が受信音を鳴らす。曲はアニメの主題歌だけどまあこれぐらいならセーフだ。……セーフだよね？

「乙女なあたしよりも、電話を優先するのか…？」

三次元よりも一次元の方が大事に決まつてただろ？…と思いながら俺は電話に出た。まあ電話の先も三次元だけだ。

「やあボクだよ。君の許嫁の叔父だよ」

氷河氷柱だ。おじさんが出てくると言つたことは悪いことが起きる

予兆と言うわけだけれど、すでに悪いことのまつただ中だ。

「おじさんいい大人なんですから普通に名乗つて下さいよ」

「子供の心を忘れないと言つて貰いたいね」

「大人に成れない子供なだけでしょ」

「楽しい会話はここまでにして、今一人かい?」

俺は樹里の所に居ると言おうとしたが、樹里は携帯の画面を見せつけてきた。

画面には「今一人つて言つてね」と書かれており、樹里は作ったような綺麗な笑顔をしていた。

「……一人だけど」

「なるほど、なら気兼ねなく話せるな。倉守が生死の境をさまよつてる。すぐにしてくれないか?」

「倉守に何しやがつた!!!!!!」

俺が怒りをぶちまけようとしたが、携帯電話を引きはがされた。

「おじさん。一体何をしたんですか?……ええノボルには嘘を言つて貰うように頼みました。……それじゃノボルは怒らないはずですよ? それに会話が多少漏れ聞こえてました。……本当の事を言つて下さい。…………おじさん」

俺の怒りが急激に引いていく。代わりに樹里がとてもすてキナエガオニナツテマス。

かざまはねれた子犬のようにふるえながら見てました。

「次同じようなことをしたら有ること無いこと全部世間にぶちまけたあげくに、学校どころか、氷河の家からも追放させますよ? これでも随分優しくしたつもりですよ? だつて、世間からは見放されますが世界には止まつているんですから」

樹里は捲し立てるように言い終わると、俺に携帯電話を返した。

「…………恨むぞ。とにかく、詳細はこっちに来てから言わせて貰う。大学の第三工学魔法研究棟に来てくれ。ボクはロビーにいるから来ればすぐに解るはずだ。」

「解つた」

俺は携帯電話を切った。

「樹里すまないが、簫を貸してくれないか？」

「嫌です」

樹里はきつぱりと答えた。

「倉守が危ないんだよ。詳細は解らなけれどとにかく行かないといけないんだ」

この時間ならまだ電車はあるけど、俺は待つなんてが出来なかつた。

「だつて私が乗せて行きたいから、それにおじさんにお灸を据えませんと」

「ならあたしも行きたい。ミルキー・ウエイなら頑張れば三人乗りいけるつて！」

「ごめん。私とノボルの二人で行きたいの。それに帰りはみみちゃん乗せていかないと」

「……そつかわかった」

男である俺がバイクの形をしている簫で女の背中に抱きつくのはダサイ。俺は自分で運転すると主張したのだが、樹里は自分で運転したいと譲らなかつた。

まあ樹里が運転する方が速いのは確かだけど。

その速さの理由の一つに法律無視があるのは……。

明らかに時速100キロオーバーの速度で空を飛んでました。

おかげで20分掛かる所が10分も掛からずについたので俺は見なかつたことにするしか無かつた。

第三工学魔法研究棟は夜の十時を回つていて、全てのフロアに電気が灯つっていた。さすが不夜城と呼ばれるだけはある。

俺たちはロビーにはいると、缶コーヒーを飲んで待つていてる氷河氷柱が居た。

「随分と速かつたね。……出来れば一人で来て欲しかった」

「それは私一人で来て欲しいと言つことでしょうか？ 難ならノボルには帰つて貰いますよ」

「……いや、一人とも来てくれておじさんはとても嬉しいよ。ここで話すのも難だからちょっと来てくれ」

おじさんはそう言つと歩き出した。俺たちもおじさんの後をついていく。

第三工学魔法研究棟では工学魔法の最先端技術がいくつも開発されている。そのため警備がかなり厳重で、いくつもの認証が必要になる。指紋、声紋、IDカード等々、それらの認証を何度もくぐり抜けて、地下へ地下へと潜つていく。

その合間に俺たちは倉守が今どういう状況なのかを簡易的に説明された。

『氷河に伝わる特訓を外部の人間に使わせるなんて信じられません』と樹里は怒りを通り越して呆れていた。

「ここだよ」

アーティファクト

地下四階の魔法道具特殊実験室の前でおじさんは立ち止まつた。

「この中に倉守さんは居る」

おじさんはいくつかの認証を受ける。認証は無事に通つてドアは開いた。

俺はその中に入つていく。

まず目についたのは部屋の中央にある井戸だつた。石造りの井戸が何故か部屋の真ん中で浮いていたのだ。

そして俺は見つめつた。

その井戸の下に倉守がいるのを。

「この部屋で擬似的に氷河の敷地にある洞窟のマナを再現している。それに月の満ち引きなどの天体的な要素が重なつていてる状況下で、特殊な結合指輪リンクリングをはめると、自らの心の中に入れる。そしてこの井戸が心の入り口と言つことだ」

俺には倉守が眠っているようにしか見えなかつた。いつものようにすやすやと眠り、頬を指で押したら起きて怒り出してくれそうだ。

「本来この特訓で死ぬような事はあまり無い。

自分の心と言うのは自分に優しく出来ているから心に殺されるような事はまず無い。それに時間が経つて天体の位置がずれたり、マナの配分が変わつたりしてしまえば、たちまち現実に戻される。問題は意図的にマナの配分をずらして、現実に戻そうとしているのに、一向に帰つてこないと言うことだ。

本来ならば、井戸はすでに崩壊しているし、時間的にも帰還しておかしくない。本来ならば三時間ほどで帰還するはずなのにすでに七時間経過している

「で、俺にどうしろって言うんだよ？」

「もし君が倉守さんを助けに行きたいと言つのなら、行くことも出来る。ただし、君が行く場合は倉守さんが行く時よりも何十倍も危険だ。

自他共に認める最強の君が死んでもおかしくない。

何故かと言えば君が倉守さんにとって他人だからだ。心は自らを守るために君を殺しに来る。例えるなら数万の軍勢に単騎で飛び込むような物だと思つてくれ。

それに待ち続ければ帰つてくる可能性もある

「なら私が行きます」

「樹里それは無理な相談だよ。魔力の波長がある程度近くないと入ることすらま办ならない。それに出来るならボクが君たちに頼る前に行つている。

新しい特訓方法が見つかつてゐる可能性があるからね。

それで火野君。君はどうする？

ボクは君に状況を提示した。強要は一切しない。ここで倉守さんを見捨てても、ボクは批難しないし誰も批難しないだろう。彼女が死ぬ覚悟を持つてこの特訓を始めたのはさきほども説明したよね

言い終わるとおじさんは一枚の紙を取り出した。倉守の書いた念

書だった。

「ぐだぐだ言つてないで、さつと結合指輪をよこせ。俺が知りたいのはどうしてこうなったかじゃない。これからどうすれば良いかだ」

「君の割り切つた所は好ましく思つよ」

おじさんは渴いた微笑をした。そして俺に結合指輪を投げわた

「駄目！」

される前に樹里がキャッチして、それを両手でぎゅっと抱え込んだ。

「駄目！ 絶対に駄目！ ノボル死んじゅうかも知れないんだよ！」

？ どうしてそんな危ないことをしようとするの！ ？」

俺は何か気の利いた事を言おつとした。

口からは何も出なかつた。

代わりに樹里の瞳からは大量の涙が流れ、嗚咽混じりで何かを訴えようとしていた。

俺は語るのを止めた。

代わりに樹里を自分の胸元に抱き寄せた。

樹里は柔らかく暖かい。樹里の頭を撫でる。ああ確かに髪は乙女の命だと思うよ。摩擦を感じさせずに手から流れしていく。

昔のことを思い出す。

樹里は泣き虫だったつけ。ことある毎に泣いて、俺の所に来て、こつやつてひたすら泣き続けてたな。そうしたらいつの間にか元気になつて……

俺は樹里の頭を撫で続ける。

「いやだよ

「うん

「わたし、のぼるがしんだら

「大丈夫、俺は死なない。樹里が待つてるからな

「だったら、いかないでよ。みみちゃんかえつてくるかもしれないんだよ

「あいつは今一人で苦しんでるかも知れない。それを助けられるのが俺一人なら、行くしかない。それに友達を放つておけない」「いじなづけのわたしより、みみちゃんをとるの？」

「もう言つ話じやない。例え、今回助けるのがお前でも俺は躊躇しない」

「のぼるはみみちゃんをいろいろとしたのになんだとすけよつとするの？」

「今は殺したいなんて思つてない」

「ねえ のぼるはわたしのことすきじやないの？」

「ああ好きだとも、

大好きだとも、

でも、今はそう言つ話ではない。樹里にひとひせやつ話などの話などに危険でも、可能性が無くても、自業自得な話であつても、そこに一筋の光が見えてる限り絶対に諦めない。

だから俺は倉守を見捨てようとは思わない。

「ごめん。

俺は心中で謝ることにした。

なぜなら、俺はずつと封印していた言葉を使うのだから。

「樹里。<sup>リンクリンク</sup>結合指輪を渡さないなら、嫌いになるよ」

樹里に子供の頃をフラッシュバックさせる言葉。俺だけが使える言葉。

胸元で抱かれている樹里が電気でも流されたように動いた。樹里は顔を上に向ける。泣きじやくつしていく、ぼひぼひで、今にも崩れそうだった。

「やだ。やだ。きりいにならないで、おねがいだからわたしのことをきりいにならないで、のぼるにきらわれたら、わたししんじや。のぼるおねがいだから、すきつていってわたしのことをすきついて！ もちつづてだきしめて！ あたままでーくちひらめー

して！」

「うん。だからこの結合指輪（リンクルーリング）を渡して欲しい。」

「やだ。わたしたらのまのしんじやうー。」

「じゃあ嫌いになる」

「いや~~~~~。」

最低最悪の方法だ。

昔の樹里を強引にひっぱりだして、今の樹里を殺して、一択を迫る。

今死ぬのと後で死ぬのどっちがいいの？  
もう聞くのとせずして変わらない一択。

俺は樹里をぎゅっと抱きしめて、頭を撫でた。

「好きだよ。樹里」

そして樹里の口を塞いだ。

俺は樹里から奪つた結合指輪（リンクルーリング）を指にはめた。

## 1学期期末試験 美海VS樹里編6

俺は目を開く。

下を見ると自分が眠っていた。

さらに言えば自分の体からも井戸が生えてた。

……ホラー映画だな。

俺は感触の無い足で倉守に近づく。倉守の井戸を覗き込む。何も見えない。

意を決して俺は樹里の井戸に飛び込んだ。

井戸の中は海だった。井戸の外から見たときは真っ暗であったのに、井戸の中は透明な海が広がっていた。

ただし、生き物も何も存在しない水だけの海。

俺はおじさんに言われたとおりに下へ下へと泳いでいく。深まるにつれて光が届かなくなつていいく。

目がくらむほどの強烈な真っ赤な光が地下から発せられる。俺はその光に導かれるように泳ぎ進む。

光はドアノブから発せられていた。俺がそのドアノブを掴むと、光は多少収まった。  
俺はノブを回す。

これが倉守の心だと言つのなら、  
この世界が倉守だと言つのなら、  
俺は違うと叫びたかった。

だって、この世界は、

すでに死んでいるのだから。

世界は廃墟だった。終末戦争後のような世界。

きっとここは家だったのだろうと想像はできるけれど、そこからどんな家族が住んでいたかの想像が全く出来ない。

大半の家には屋根が無い。壁があれば良い方で、人間の代わりに人間が使っていただろう瓦礫が中を埋め尽くしている。

世界は黒と白で構成されていて、アニメのようにも思えた。

俺は自分の手を見る。黒の線と白の空白が俺だった。そこにノイズが混じり、線が乱れる瞬間があるだけだった。

生物なんて居るわけ無かつた。

世界を観測する俺ですら生物と言えない。

俺は道だつたモノを、今では荒波がそのまま固まつてしまつたような真つ黒の上を歩く、一いちが世界の中心で有ることを俺は何となく理解できてしまった。

心は直<sup>す</sup>らを守るために攻撃してくるだら<sup>す</sup>とおじさん<sup>は</sup>言つていた。

そんな事は無いと俺は断言できた。

心そのものが死んでいるのに、守るなんてあるのだろうか？

俺は歩いた。歩いた。歩いた。一体どれほど歩いたのか全く理解できない。

この世界に時間という概念は有るのだろうか？  
ここに歩くという概念が存在するのだろうか？

そうか魔法だ。

俺は一人で和声<sup>ハーモニー</sup>魔法を使う。時の概念は自分の時属性の魔法を使えばハツキリするのだろうが、時魔法を一切使いこなすことが出来ないので、諦めるしかない。

使用した魔法は風属性の魔法だ。

何も起こらなかつた。

他にもいくつかの属性も試してみたが、何も起こらない。

……クソジジイ。

俺は歩く、たぶん歩いている。あるいは歩く言われた行動をしている。はず。  
いくつもの筋肉を微妙なバランスで動かし、足を一步一歩踏み出している。  
はずだ。

この段階で俺は一つの間違いを犯していることに気がついた。  
心は間違いなく防衛している。目に見えない形で、心そのものを  
浸食するという方法で、  
もしかしたら俺は両手を回すという行為を歩くと称してゐるのかも知  
れない。

あるいは魔法と言ひ行為と声を発する行為を間違えてるのかも知  
れない。いやいや、言葉そのものが浸食されてる可能性だつてあ  
る。

少なくとも俺の時間はこの世界のモノであるはずだ。  
オレがおれであると言ひ保証はこの世界に存在しない。

世界に色があった。俺はそれに向かって歩く。  
まるで生者の生き血を求める死者のよつ。

赤い色。

血のような真紅の紅。

まるで自分が子宫に帰つて行くような奇妙な感覚があった。

赤は徐々に近づいてくる。

赤は扉だつた。扉だけがあつた。さきほどの海で見た扉のよつ  
ドアノブが光つていた。

俺はこの先に倉守がいると確信した。

それと同事にあけてはいけないことも解つていた。

しかしその開けてはいけないという判断は倉守の判断だ。俺の判断じゃない。

俺は助けに来たのだ。そして倉守は助けられる立場にある。と思う。

俺はドアを開く。

そこには祭壇があり倉守が横たわっていた。石造りの神殿には所々に火が放たれている。

壁には赤と黒のアラベスク模様が変幻自在に動きながら広がっている。

俺は倉守の肩を揺する。

「帰るぞ！！」

倉守の魂はここに無かつた。

俺は倉守の顔を見る。

倉守は涙を流していた。

「おにいちゃん……」

倉守は寝言を呟く。

お兄ちゃん？

倉守に兄弟がいると聞いたことが無かつた。倉守の事だから聞かれなかつたから答えなかつただけなのかも知れない。

「おい！ 倉守！ お兄ちゃんがどうし……！」

「無駄だよ。みーちゃんはここに残ることを選んだ。壁をよく見てごらん。それがみーちゃんの見てる夢だ」

男の声が聞こえる。

俺は男に従い壁を詳しく見る。

模様だと思っていた物は、男が女に殺される瞬間を何度もリピートしている物だった。

男はありとあらゆる方法で殺され、斬られ、蹂躪されていた。

そして俺は男も女も知っていた。

男の方は三村伸吾。

一般家庭出身でありながら、名家出身相手に勝るとも劣らない実力を誇り、たつた一年間魔法高校に通つただけで、学園ランディング12位に入つた事で知られる。

詳しく述べ知らないけれど死んでしまつた男だ。

女は神無月鬼姫。

名家の一つに数えられる神無月家の双子の片割れ。学園ランキン  
グ67位。

彼女を一言で語るのならば、「二つ名を言えれば良い。」  
虐殺の王女。虐殺の王女はありとあらゆる方法で三村を殺す。  
踏んで縛つて叩いて蹴つてじらして吊す。  
切つて殴つて刺つて刺して晒して垂らす。  
まるでオモチャを投げ回して遊ぶ子供だ。

虐殺の王女なら、これが私の愛だよ。とでも表現する瞬間瞬間を  
倉守は見続ける。

俺は想像する。

なぜ倉守が心の世界でこんな物を見続けるのかを。  
俺は空想する。

どうして倉守は強くなることに固執していたのかを。

一つだけでは解らなくて、一つそろえれば解つてしまつ。

倉守がこの学校に入つてきた理由は三村伸吾を殺した神無月鬼姫  
を殺し復讐を果たすことだ。

一つだけなら解らなくて、一つそろえれば疑問に思つてしまつ。

どうして三村伸吾の復讐を果たそうと思つのか、三村伸吾とせど  
ういう関係だったのか。

お兄ちゃんつて呼ばれてるけど、三村は一人っ子だ。

「帰るぞ。期末試験終わつてないだろ？ 退学させないつて約束し  
ただろ？」

俺は倉守をおぶつとした。

「帰らせないぜ」

先ほどの声の主が俺の肩を掴む。

俺は男の顔を見る。

「三村伸吾？」

どうしてと思ったがここは心の世界だ。何があつてもおかしくはない。

「オレと一緒にいることを決めたからだ。

この世界は一瞬と無限が等しい。

ここならオレとみーちゃんはずっと一緒にいられる。

みーちゃんにとつての世界はオレとの関係性に集約されてくる。ならばこの世界こそが現実で、それ意外は虚構だ。

世界にオレとみーちゃんだけが居れば良い

「帰れないじやなくて帰らないと」

「その通りだ。解つたのならさつと帰れ。帰らないとさつのない」

この場で殺す

三村は手から炎を出す。

三村の二つ名は機略獸王きりやくじゅうおう。

多彩な戦略とアクロバティックにリングをかけずり回る二つの特長から付けられた二つ名だ。

この世界で魔法が使えていない俺と、学園トップクラスの魔法使い。

勝負はやる前から見えている。

三村に魔法が使えて、俺に魔法が使えないのは、俺が呼ばれないからだらうか、魔法の無いあんたになんか意味が無いとでも倉守は言いたいのだらうか？

この三村も倉守の心だとさつのなら、俺は帰るべきなのかも知れないと、一瞬思つてしまつた。

違う。

それなら最初からもつと抵抗しているはずだ。  
きつと倉守は深い眠りの中で戦っている。

甘い虚構と辛い現実のどちらを選ぶべきか戦っているはずだ。  
考える。

勝機をもぎ取るよ、倉守をもぎ取るために今必要なのは  
三村は手に出していた炎を俺に放つ、としさに横に飛ぶ。右足の  
あつた場所が黒く焦げた。

「帰れと言つてゐるだろ」

どうやら考へる時間をくれないみたいだ。

三村は俺に一気に詰め寄つてくる。体の動きから相手の動作を読  
み取り右ストレートを紙一重でかわす。

おかしい。

三村はこんな戦い方をしないはずだ。

三村はさらに俺に攻撃を連打してくる。俺はそれをかわす。魔法  
が使えない以上一発でも当たつてしまえば致命傷だ。

マナや魔力で体をコーティングすれば、ある程度のダメージと痛  
みは軽減できる。しかし魔力全てを火属性の体内魔法で筋力増加す  
る相手にどれほど意味があるのかい。

左フックに対応しきれずに俺は転んでしまう。  
腹に蹴りが一発はいる。

呼吸が止まる。

声にならない声を吐く。

体ごと吹つ飛ばされ壁にまでぶつけられる。

全身を強打する。

痛みが暴れる。

三村はゆっくりと俺に近づく。

勝者の余裕という奴だろうか。いや、勝者の慢心だ。

今ので大体見えてきたのだから。

生前の三村の戦い方は風属性、木属性、光属性の三つを主軸に起きつつも、相手によつて臨機応変に魔法を変えていく。

少なくとも体内魔法、体外魔法、共に火属性でどうにかするバ力な戦法はしない。

この戦い方は

「弱かつたな火野昇君。強いつて聞いてたのに残念だよ」

三村は火を放つ。広範囲に及ぶ

俺は癖を見破つて、火が出る瞬間。火の方向を完全に掴み、体を伏せる。

そして俺は火属性の魔法を使って一気に三村との距離を縮める。三村がなぜ火属性しか使わないのか。

その考えがまず間違つてた。

三村は火属性しか使えないのだ。

あのジジイの言葉のおかげで考えようともしなかつたが、少し考えれば出てきたはずの推論だ。

この世界において魔法を使うとき入力は倉守になるらしい。<sup>イ</sup>つまり火属性しか使えない。

本来自分が自分の心の中に入る特訓だからジジイの話は一応間違つてはいない。

それに他人が入ってきたとしても、この特訓を行うのは氷河の一族のみで、しかもこんな特訓をする奴らは全属性を使って当然。禁忌属性は扱うのが難しいので使おうともしないはずだから気づく切つ掛けが無かつたのだろう。

俺は足払いを試みる。

いつもの倉守なら転ぶ。

そして俺の予想通りに三村は転んだ。  
ここは倉守の心の中だ。

倉守の三村像であつて、本物の三村では無い。

これは推論なのだが、三村が魔法使いとしてこの学校で有名なのは知っていたが、三村がどんな戦い方をしていたのかを知らなかつたのでは無いのだろうか。

しかし知識として三村が魔法使いであることを知つてはいる以上。魔法を使わるのはおかしい。

そこで自分の魔法使いとしての部分を強引に押し込んだと言つわけだ。

使える魔法は同じ。相手は三村の皮を被つた倉守。負ける要素は無い。

俺は炎を爆発させて三村の足下を吹つ飛ばす。それを三村は転がつてかわすが、

そんなのすでに見えていた。

柱を蹴り飛ばして三村の方へ倒す。俺は三村の逃げ道を塞ぐように回り込む。

それと同事に遅延魔法を炎属性に反応するようにセサセサツする。

予想通りに三村は苦し紛れに柱を爆発させようとする。

遅延魔法は爆発に反応して、柱から三村に向かってまつすぐ炎を放射する。

三村は燃えさかる。

間髪入れずにぶん殴る。壁にまで飛ばす。さらに膝撃ちでトドメを刺す。

三村は崩壊する。グロテスクなスライムのように溶けていく。

さて、倉守をおぶつて帰るか。

俺は倉守がいるべき祭壇の方を振り向く。

「前言撤回。中々楽しめそうじやないか

三村は倉守をお姫様だっこしながら俺を眺めていた。

俺は何度も三村を殺す。焼き殺す。斃り殺す。蹂躪する。虐殺の王女にでも成った気分だ。

三村は何度でも蘇り俺を殺そうとする。俺は機械的に三村を殺し続ける。

「さて、いつまでオレを殺そうと思うのかな？ 無駄な事なのに」「諦めない。俺は倉守を見捨てたりしない」

「冷静さを失った時点で君は敗北したも同然と言つことも解らないのか？」

オレはみーちゃんそのものなんだぜ？」

三村は倉守の顔に豹変させて笑う。

それがヒントだと気づくのに若干の時間を要した。

倉守が自分の心に打ち勝たなければ意味が無い。

俺がいくら三村を殺した所、それは倉守が勝つた事にならない。

倉守が自分で三村を倒さない限り、三村は蘇り続ける。

「もう、諦めてよ」

三村は倉守に変貌し俺の服の裾を掴んだ。

祭壇にいるのとは違つて眼鏡を掛けている

「あたしには無理だつたんだよ。学校に行くのも、誰か友達を作るのも、魔法使いになるのも、復讐するのも、

あなたの和音になるのも。

あたしに出来る事なんてここで眠り続けることしか無いんだ。」

「違う！ お前は立ち上がつたんだ！ 強くなつとした。学校にだつて通つてるだろ？ 友達だつて居るだろ！？ 風間だつているし、樹里だつている。俺だつている。

それにお前はもう立派な魔法使いだ。

立派に俺の和音だ。今は弱いかも知れない。今だつて自分に負け

そうになつてている。でもお前は目標に向かつて間違ひなく歩いてき

た。

「お前は三村伸吾を殺した神無月鬼姫に復讐したいんだろー!?」

「やつだった。やつだったよ。でもあたし、氷河に負けて退学にならる……」

「俺にローチさせておいてタダだと思つなよーー。お前が最強になるまで俺は絶対に退学させない。覚悟しろ!」

俺は倉守に背を向けて、倉守を見る。

ドンパチやりまくったのにこいつは今まで涙を流しながら寝てやがる。

のんきなものだ。

「倉守こじがお前の心ならわっとお前は最初から見てるんだろーー。わっと起きるーー。」

無反応。

さて、起きない女の子を起こす方法と言つのを俺は知つてこる。もはやベッタベタで古典的な方法。

まあ倉守は喜びそうな方法ではあるけれど。

心の世界であつて、現実じやないからこれはローカウントだと俺は言い訳する。

「あいい加減に目を覚ませ」

俺は眠り姫に口づけをした。

「あたしの　　おーじさま?」

倉守は寝起き早々寝ぼけていた。

んな訳あるか。

「残念ながら、俺は王子様つてがらでも無いし、お前もお姫様つてがらじやない。まあ良いところ小間使いの灰がぶりぐらこさ

「ひつじうときぐらこちょーし合わせろつーの

そんな余裕有るわけ無いだろ。

俺もむかついたので、灰かぶりの意味はシンデレラで、正真正銘お姫様であると言つことは黙つておくことにした。

「どうしてあたしが目覚めるの？」

眼鏡を掛けた倉守は驚愕していた。

「ここならお兄ちゃんとずっと一緒にいられるのに…？」

倉守は立ち上がる。眼鏡を掛けた倉守を睨み蔑む。

「あたしは勝つためにここに来た。お兄ちゃんに会つためじゃない」「戦つて勝つて復讐してそれがどうなるつて言つの… あいつを殺したつてお兄ちゃんは蘇らないのに！」

「もう後悔したくない！」

もう迷いたくない！

あたしは誰かの大切な人を殺されていくのを見過ごしたくない！

もう誰にもあたしと同じ悲しみを背負わせたくない！

その為だつたらあたしはあたしを絶望させた力だつて使ってやる！  
こんな歪んだ町、破壊してやる！」

「あたしにそんな事出来るわけ無い！ 守られてばっかりの弱いあたしに何が出来るつていうの！ そんな幻想が現実になるわけないじゃない！」

倉守は一瞬黙つてしまつ。喉が震える。次の言葉を紡ぎ出そうとする。

しかし意志は言葉にならずに口の器に飲み込まれていた。

「誰が出来なつて決めた！」

お前は弱いかもしれない。

お前一人じゃ弱いかも知れない。

だつたら俺に助けを求める！

そうしたら俺が現想を幻実にしてやる！」

「……………あたしを……………あたしを、助けて！ ノボル！」

弱いあたしを助けて！」

「ああ助けに来たぜ！」

もう倉守は弱くない。

少なくとも、人の弱さを見せられるぐら<sup>い</sup>には強くなつた。

「それはあたしの強さじやない！」

眼鏡を掛けた倉守の体は徐々に崩壊していく。

「今はそうかも知れない。でも何時か、何時の日があたしの力になる！あたしはあたしの幻実<sup>げんじつ</sup>を手に入れる！

だから弱いあたしはもういらない！

さようなら、あたし

眼鏡を掛けた倉守は消えてしまった。

「じゃあ帰るか。実は期末試験つて本番が残つてゐる  
助けてくれるんでしょう？」

「当然」

俺は振り返る。

「みーちゃんがオレを殺せるわけないだろ？」

入ってきたドアを守るよう<sup>に</sup>、三村が立つていた。

「あればお前の心だ。お前じやなきや壊せない」

「壊してやる。あたしの幻想を！」

倉守は火属性の魔力を手のひらに集めようとする。

「無理だ。オレは幻想じやない理想だ。みーちゃんの愛する王子様だ」

「違う！あたしは……」

俺は倉守の手を掴む。

「俺が出力をやる。お前は入力<sup>イン</sup>だけやれ」

この世界で入力を倉守がしてると言つのなら、本人から直接供給した方が強いはずだ。

倉守と協力して倒すのだから、倉守が倒したことになると俺は信じたい。

倉守の手を強く握る。

倉守も強く握り返す。

今まで感じたことの無いほど鮮烈な魔力が体を駆け回る。

これが倉守の才能だと言つのだろうか？

俺は手を突き出す。

体に抑えきれない魔力が手から火の姿を纏つて躍り出る。それだけでも俺の親父すら超えた魔力量だ。

「さよならお兄ちゃん」

倉守の悲しい声が聞こえた。

俺はそれを合図にして魔力を爆発させる。

手のひらから、100メートルを超える直径の炎が放射された。神殿は形を変えていく。

火が世界を覆い尽くす。しかし火は一瞬で樹木に変わっていく。

樹木は四季を一瞬で巡る。

「今度こそ帰るぞ」

「うん」

俺は倉守の手を引っ張りながらドアを開いた。

元来た道をたどり、俺は目を覚ます。

「ノボル！ノボル！ノボル！ノボル！」

樹里が俺を抱きしめながら泣いていた。

「おいおい。抱きしめるなら心の中で遭難してた倉守にしてやれよ  
死んじやうかと思つてすつごい心配したんだからー。」

「俺は最強なんだぜ。死ぬわけ無いだろ？」

俺は微笑み樹里の頭を撫でる。

「ふああああ……なに朝からバカッフルやつてんのよ  
遅れながら倉守も起きてきた。

「つてかここどこ？」

「もしかしてお前記憶無いのか？」

「ちょっと待つて、今思い出すから

ああ特訓してたんだ。

それから、それから、どうしたんだっけ？

「どうやら記憶してないらしい。

まあ良いか。これでキスした事はノーカウントだ！ 樹里に殺される可能性がまた一つ減った！

俺は寝起きの癖でケータイにメールが来てるかどうかのチェックをする。

メールは来てなかつた。

替わりに大切な事を知らせてくれた。

ただいまの時刻はAM9:32

ここから会場まで普通に行くと30分はかかる。

遅刻させようとしたら自分も遅刻しかけているだなんて。

策士策に溺れると言つ葉はこうこうときにも使うのだろうか？

倉守の呪詛めいたその言葉の方が俺には怖いけれど、まあ致し方なし。

「樹里そろそろ減速しろよ！」

樹里がハンドルを握り俺が倉守を抱きかかるように後部に座り、安全運転とは無縁の超スピードで飛んでいた。

倉守震えながらも樹里のお腹に手を回して必死に掴んでいた。

溺れる者は藁をもつかむと言うけれど、飛んでもスピード

でる方にはじかみーぐと書くはとくな變分なソガニシガニ

この方法を使います！

樹里はさらに速度と高度をあげる。

樹里が何をしたいのかおおよそ解ててしまつた

試験が開催され、アーバンの黒板がまたまた汚れた。

鳥が獲物を狙つて急降下するように籌も急激に降下を始める。

俺の繩里は試験にて謝る。謝る。」がなん

ああ、  
倉了が諒解しないのは大地を踏みしめる事に感動してゐるからだ。

倉守は、ソファに座り、迷い心地は三三をあてて、  
に呼吸をしている。

「そんな派手に入場するならあたしも混せてよ！」  
そんな倉守を見ながらノ一天気な発言を風間はしてるのでから、  
世の中というのは解らない。

「ああ」「めんこ」の第三三人までなんだレン太くん

「だから名前で呼ぶんじゃねえ！」

「……まあ時間には間に合つたので今回は良しとしましょ。注目されてる試合なので、目立つ行為をしたい気持ちも解りますが、そう言つときは事前に連絡して下さい。多少ならこちらでも融通します。開始時間も近いので、早速試合を始めますが、事前申請との変更はありますか？」

試験官は舌打ちしながら言つた。

「これを使いたい」

「そう言って俺は試験官にしか見えない」とレコーダーを見せた。

「音の魔法を使いたくてさ」

「どうせまた卑怯な手段で勝ちに行くのでしょうか？」

「策士と呼んで欲しい」

試験官はあきれていたが、HJレコーダーを受け取り一通りチェックした。

「魔法道具<sup>アーティファクト</sup>でも使用禁止の道具でも無いので許可します。氷河樹里、

風間恋愛、倉守美海の三者は特に問題有りませんね」

三者三様に頷いた。

(倉守、お前が入<sup>イン</sup>力をやつってくれ。俺が一気に片を付けてやる)  
結合リング越しに俺は倉守に話しかける。

お互いにリングの上にたつて、後は開始の合図を待つだけになっている。

(りょーかい)

倉守は体内にマナをため込み始める。

試合開始前の観客のざわつきが俺は好きだ。

どんどんと自分の心臓が音をたてるのがわかる。

思わず笑みがこぼれる。

ゆっくりと深く呼吸をして自分を落ち着ける。

試合開始のホイッスルが鳴る。

「樹里！ このECレコーダーにお前の台詞が入ってる！」

これが脅迫行為に入らないギリギリの台詞だ。

だから勝ちを譲れ、って言い始めるとさすがにルール違反で俺が負ける。

しかしあ前の台詞が入ってるだけじゃさすがに脅しにならない。心属性の魔法は発音が必須になつていて、風属性の応用で使う音の魔法なら、相手の声を事前録音して、好き勝手に喋らせて相手を錯乱させたりも出来る。

これだけなら俺はこれからあなたの声を使った音魔法を使いますと宣言しているだけだ。

少なくともルール上では違反にならない。ほんと卑怯な手段だと自分自身を蔑みたくなる。

さて、これがルール的な意味だ。

もちろん言葉は言う人と聞く人の二つに分かれるし、言葉の意味も言う人と聞く人に別れる。さらに聞く個々によつて意味が変わつてしまつ。

風間にも観客にも意味不明な言葉であつても、樹里にとつては簡単に思い当たるはずだ。

そりやほんのちょっと前にちゅーしてだの、あたままでだの、と言つた事をそう簡単に忘れられる訳がない。

そんな俺の為だけに言われた言葉が衆目に晒されたら、そりや恥ずかしがり屋な樹里じゃなくても恥ずかしいだろう。

事実、樹里の顔は一瞬にして真っ赤になつている。

倉守から送られてきた火属性の魔力を全部体内に回して、樹里の近くまで回り込む。

心の世界レベルの魔力は期待していなかつたけれど、普段と変わらないのは残念だ。

風間は風と水の重奏魔法で細長い水の刃を放つ。俺の得意としていた魔法であるウォーターカッターをわざと俺に使うだなんて、楽しいことをしやがる。

俺を目がけて細長い水の刃が飛んでくる。

自分で使う魔法の弱点なんて簡単に解る。

俺は直線で飛んでくるウォーターカッターを前に軸をずらして避ける。

ウォーターカッターは真っ直ぐ飛ばさないと威力が激減する。そのため、飛ばした後に、方向の変換が出来ない。

さらに第一第三のウォーターカッターが飛んでくるがそれも同じ要領でかわす。

本来ならこの攻撃で相手の移動方向を狭めていくのだが、魔力の供給が足りないみたいで攻撃が止まつた。。

魔力を供給するはずの樹里は真っ赤になりながら固まっているのだからしようがない。

と言つても、ここは戦場だし、樹里は一流の魔法使いだ。ずつと固まつていいわけがない。

もちろん俺もそんなの把握してる。

樹里の目前まで来た。さすがの樹里も身構える。

ここで肉弾戦に持ち込んでも勝ち目は無い。

肉弾戦をしている合間に、<sup>イン</sup>入力と<sup>アウト</sup>出力を入れ替えられて至近距離

で魔法を食らうのが落ちだ。

そう言つわけで俺は樹里の髪をかき上げてふと息を吐いた。

子供の頃からロングヘアだった樹里にとつて耳にふーっとされるのはかなりくすぐつたいらしい。

子供の頃やり過ぎて怒られたから忘れようがない。

そして期待通りに樹里の硬直時間が延びた。

風間が俺に駆け寄つてくる。

俺は樹里の背後にまわり樹里を盾のよつとして、風間に攻撃を躊躇させる。

その合間に俺は右手で樹里をしっかりと抱いて、左手で火を放ち、風間を後方に逃げさせる。

あまりやりたくは無かつたけれど、俺は樹里の胸を揉んだ。手に柔らかい感触が伝わる。

「ひやう！！」

樹里は体をビクつと動かしながらまめかしい声を出す。

俺はその隙をついて、樹里の右手にある結合指輪リングクリングを引き抜いてリ

ング外に投げ捨てた。

開始一分もたたずくに勝敗は決した。

俺に新しい一つ名が付けられた。

ひきょう  
卑強だ。

樹里との戦い以前から、火野昇は魔法使いとしてはあり得ない戦い方をしていると極一部で話題になっていたらしいが、今回での有名になってしまった。

そりや、脅して、耳に息吹きかけて、胸揉んだりしたら言われても仕方が無い。

ついでに倉守には喊落（落ちながら悲鳴をあげてたから）樹里にはシュー・ティングスター（風間魔法工業のバイクの名前でもある）なんて二つの名がつけられた。

これがたつた一日で広まるのだから、今の情報社会つて奴は怖いつたらありやしない。

テストが終わった次の日が終業式なのだが、クラスの奴らは俺を卑強と二つ名の方で呼びやがる。

夏休みの一ヶ月間で沈静化してくれることを願うばかりだ。

「まあ無事に勝てて倉守さんの退学を阻止できたのだから良しとしない。終わりよければ全て良しと言つだろ?」

こんな状況を作った氷河氷柱は笑う。

終業式も無事に終わり、さて学生寮に帰るにつかって時に、廊下でジジイに呼び止められた。

「おかげで君たちが勝つ方に掛けてたボクも給料が十一倍になったし、みんな幸せハッピーエンドだ」

「倉守に氷河の特訓をさせた理由はそれか!」

「まあまあ、ジュースを奢つて上げるから」

そう言つてクソジジイは俺に缶ジューースを強引に持たせる。

「まあ夏休みを楽しみたまえ」

そう言つてジジイは逃げるよつと去つていつた。

だから俺はあいつ嫌いなんだよ。

俺が家に帰ると樹里が待つていた。

予備の鍵なんて持たせてないから樹里が家に入れたのだろう。

「ただいま。倉守は？」

「おかえりなさい。みみちゃんにはちょっと外して貰つてます」

「ああそこの」

となると、何か重要な話でもしに来たのだろうか？

一応夏休みの予定は特訓と特訓と特訓しか入つていらないわけで、その特訓の相手は樹里だし例年通りなら特に話すような事もない、はず。

樹里は顔を少し赤くする。

「あの……エレコーダー……」

「ああ昨日の試合の奴か。説得力を持たせるためだけに見せただけで実際には録音していない」

「ほ、本当に？」

「ほんとだつて」

あんな感じの台詞を聞きたくなつたら、樹里をいじめれば済む話だから録音する理由が俺には無い。

「じゃあ、確認の為にエレコーダーに何が入つてるか聞いても良い？」

「まずい。非常にまずい。」

あの中には、俺が練習していた樹里を長時間止めるためのプロポーズ台詞集が大量に入つたままだ。

「いや、中には何にも入つてないよ」

「じゃあ聞かせてても良いですよね？」

「まら

」

「聞かせてくれても良いですよね？」

俺は寝室に入り、枕元においていたエレコーダーを物理的に怖そうとして手に取った。

樹里は俺の手首を掴んだ。

俺は手を挙げて出来る限り高い位置に持つて行こうとする。樹里も負けじと俺の手にしがみつく。

体が密着する。足がもつれて倒れ込んでしまう。樹里が上になるようになり重なる。

「樹里好きだ！！！！！」

そしてその衝撃で間違つて再生ボタンを押してしまつ。少し首を傾ければ樹里の顔を見ることが出来るけど、恥ずかしくてできるか！

なのに体が折り重なつてゐるから、樹里の心臓の音が聞こえてしまう。

「ぐぐぐぐぐぐ、と心臓は高鳴つてゐる。

「……な、入つて、なかつた、だろ？」

俺は頑張つて声を振り絞る。

「う、うん

樹里も弱々しく答える。

俺たちばかりして良いのか解ららずにそのまま固まつてしまつた。おそるおそる樹里の顔を見ようとするが、樹里と皿があつてしまつた。

樹里はどうして良いか解らずに困惑しながらも、嫌そうな顔は一切していなかつた。

瞳に恥ずかしがつてゐる俺が写つてゐる。

樹里の息が顔に当たる。

唇がみずみずしく見える。

「ええと、その、」

樹里は何かを語りうとした。

「…………あんたら何やつてんの？ バカツプルつてかバカだよバカ。」

「コンビニの袋を抱えた倉守が、頭を抱えながら軽蔑するような瞳で見ていた。

倉守が深く追求してくるかと思つたが、『ばかつぶるもいいかげんにしろつづーの』と一言だけだつた。

まあ倉守が追求しなかつたのは俺と樹里がとにかく言葉を並べ立てて倉守に喋るタイミングを一切『えなかつたと言つたのも有つたかも知れない。

「あんたが夏休み実家に帰省しててくれるおかげで、あたしとしては部屋を広々使って最高だわ」

「一ヶ月間会えなくなる和音との別れの言葉がそれかよ

夕方になり実家に帰る時間になつた。

実家と言つてもここから電車で一時間ほどの距離なので、魔法特区に行こうと思えばいける距離だ。

特訓漬けで無理だと思うけどな。

「お前、俺がいなくなつたら飯は自分で作るんだぞ？」

「べつにー、一ヶ月後あたしの料理の腕に驚けばいいや」

「うん？ 俺のためにご飯作ってくれるのか？」

「ばーか」

倉守は視線を微妙にそらした。

一ヶ月後の楽しみが増えた。

「俺としては料理の腕じゃなくて魔法使いとしての腕を磨いて欲しいところだ」

「あなたの言つてた特訓メニューはきちんとやるつて

「おひ。精進しろよー。じゃあ一学期こまたな」

「……せーぜーしぬなよ」

ほんつと素直じゃねえよな。と俺は心で悪態つきながら手を振つて倉守と別れた。

倉守も俺に手を振り替えした。

その顔は心なしか笑つているよつに見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8195z/>

---

最強の俺と最弱の少女が魔法学園で同居生活（仮）

2012年1月13日22時57分発行